

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第八十一卷第十一号
日本幼稚園協会



11

幼児の造形百科

桜井俊夫 著

幼児の造形活動に関する幅広い知識と技術を身につけよう。

本書は幼児に必要な造形活動の基本的な考え方をはじめ、子どもの発達に応じた指導計画のたて方、さらに具体的な素材別指導方法などをとりあげた総合的な造形指導百科です。「描く」「写す」「映す」「作る」「壁面構成」の五つの柱からなっていて、身近な紙、粘土、木、発泡スチロール、段ボール箱などの特色を使った造形遊びの指導書です。

ISBN 4-7784-0000-1 NOOE-HMOOE

みんなでたのしむ

折り紙あそび

荒川智子 著

どのページも美しい写真と、保育に生かすアイデアがいっぱい。

昔から伝わった作品と、著者オリジナルの創作作品の中から子どもたちが大好きな折り紙一〇〇種余りを紹介。わかりやすい図解付。誕生カードやプレゼント、室内の環境構成に生かすアイデア、保育に生かすヒントも掲載。保育に折り紙を使うことによって子どもと心のふれあいなど、いろいろな遊びが展開されます。

ISBN 4-7784-0001-1 NOOE-HMOOE

育ち育てる

絵の指導

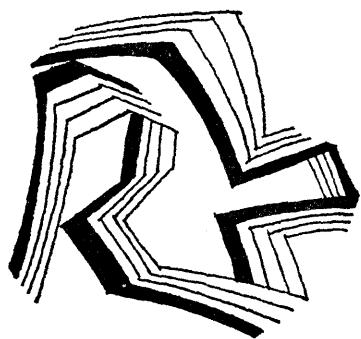
林 健造 著

幼児の絵のよみとり方と創造性をのばすための指導書

幼児の絵は心の表われといわれているが、子どもがのびのびと表現するためには、想像・技術・伝達の三つの系統からの適切な指導が大切である。子どもたちの大好きな造形活動を通して、日ごろ著者が考え、試みてきたこと、園の先生方と話会ってきたことを中心にまとめたもので、子どもの心と表現する力を育てるための好著。

ISBN 4-7784-0000-0 NOOE-HMOOE

幼 児 の 教 育



第八十一卷 第十一号

幼 児 の 教 育 目 次

—— 第八十一卷 十一月号 ——

© 1982
日本幼稚園協会

保育論のことば考

—— 『遊び』 を例に —— 小 川 博 久 (4)

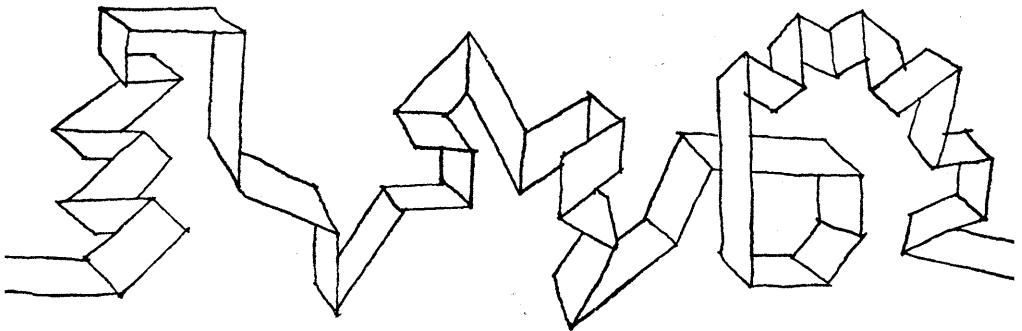
私の幼児教育論 畠 中 徳 子 (6)

家庭での教育と幼稚園の教育 並 川 明 子 (12)

私のアメリカ体験記

—— 現代アメリカにみる親子の世相 —— 進 藤 君 枝 (17)

エリクソンと幼児教育 (12) 仁 科 弥 生 (24)



近代短歌に現われた子ども (六)……………大塚雅彦…(33)

★幼児の教育復刻記念懸賞論文 優秀論文

初代編集者東基吉を通してみる『幼児の教育』創刊の時代(上)

……………国吉 栄…(41)

保育の一日 ⑧

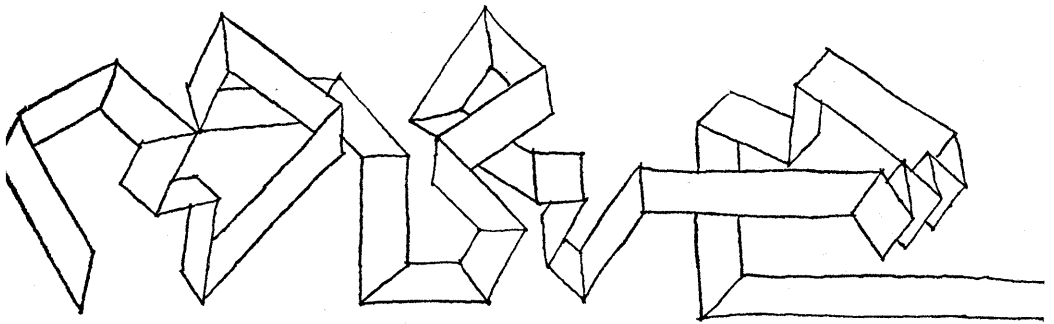
——存在世界としての保育——……………津守 真…(54)

史料紹介

『邦訳 日葡辞書』⑩

——わが国中世の児童文化史研究によせて——……………(61)

表紙
紙・うすい・しゅん
表紙題字・比田井和子
カット・福田理恵



保育論のことば考

——『遊び』を例に——

小川 博 久

「子どもにもっと自由を与えよう」「子どもは十分に遊ばせてやるべきだ」「子どもの遊びの指導こそ保育者の重要な課題の一つである。」

これは多くの保育者の共感を受ける主張であろう、異議となえる人は少ないはずである。これは保育の「常識」であり、保育者のいわば「良識」にあたることだからである。

では、当の子どもたちはこの主張をどう受けとるだろうか。子どもたちは自らの立場を主張しえない。そこで、子どもを親しい友人に見たてて、先の主張を語りかけてみよう。

「君たちにもっと自由を与えよう！」というように。

誇り高きわたしの親友ならきっとこう答えるだろう。

「大きなお世話だ。自由とは他者から与えられるものではない位、君も先刻、御承知のはずではないか。君の云い草は啓蒙専制君主が従僕に云うことばそのものだ。わたしは君と同様、独立した個人(individual)＝分割できない存在」として自分のことは自分で決めたいのだ、つまり、わたしはわたし自身の主人でありたいのだ。だからこそ自由を求めるのではないか。」

「また君はわたしを『遊ばせてくれる』という。しかし、『遊ぶ』ということばを使役的に使うと、どういうニュアンスが生ずるか考えたことはあるかい。『泳ぐ』ということばを『もう少し泳がせてみるか』というように使役的に使うの

と同じなのだ。これは刑事が容疑者の行動を監視するとき云うことばだ。もしかりに君がわたしを『遊ばせてくれた』としても、わたしはきつと『遊んだ』とは思うまい。操られたとしか思えないだろう。」

「そんなわけで、君が『遊び』を指導するといっても、わたしは当惑するばかりだ。いったい君はわたしになにをしたいのだ。わたしが『遊ぶ』のはわたしがそうしたいからであり、どこでだれとどんなふうに『遊ぶ』のかを決めるのはこのわたしなのだ。わたしが決めるから楽しいのだし、楽しいからわたしが決めるのである。」

「あるいは、君はわたしのしらない『遊び』をわたしに教えてくれようとしているのかもしれない。でもそれは、君の知っている『遊び』の知識や技能を教えてくれようとしているのであって、『遊び』を指導しているのではないんだ。なぜっていくら『遊び』をよく知っていても、遊びたくないものだったら、遊ばないからね。どだい『遊び』などというものは、指導できるものではないのだ。それは生まれてくるもの、湧きあがってくるものだよ。」

「もし君がそれほどわれわれの『遊び』に関心を持ち、『遊

び』がわれわれにとって大切だと思ふのなら、われわれの『遊び』の仲間になることさ。君はおもしろいやつだ、君といると楽しくなると思えば、いつでも仲間に入れてやるぜ。」もし友人のこのことばを幼児の反応として受けとったら、保育者はどうしたらいいのだろう。もう一度こう自らに問い返さねばなるまい。

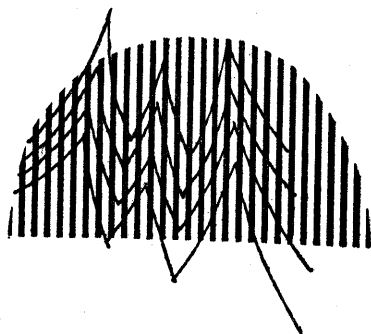
「わたしにとって『自由』とはなにか、今わたしは自由を求めているか」

「わたしにとって『遊び』とはなにか、今わたしは『遊び』をエンジョイしているか」

「どうしたら幼児たちと『遊び』を共有できるか」

この問いに答えることは、すぐできることではなさそうだ。子どもたちとのつきあいの中で日々自問自答しつづけることではないだろうか。そしてルソーが「エミール」の中で、ホイジンガが「ホモ・ルーデンス」の中で、カイヨワやフィンクやアンリオが問いかけたのも同じような問いであったような気がするのである。

(東京学芸大学)



私の幼児教育論

畠中 徳子

これは「幼児教育論」というより、今、私が幼児教育科の学生に接していて、あるいは大学の乳幼児研究室での幼児の集団指導や教育相談を通して幼児と出会って感じていたり、考えたり、又母親としてかつて幼児を育てた経験から、「こういうことが大事なのではないか」と考えるに至ったことの一つである。

幼児教育に携わる人がいつか一つの「幼児教育観」を

もつに至るのは、日頃幼児と接していて体験的にハッとしたり、驚いたりしたことが誰かの幼児思想と出会い、あるいは自分なりにその体験の意味を考察するうちに深まっていった、一つの理論的な体系を形づくっていくのではないだろうか。ただその際、どのような幼児教育思想に出会うか、あるいは体験の意味をどのように考察するかというのは、いろいろな過程を経ても何らかの形で自らが選択したものであるということだ。

この「選択」にあたって、何が一番強く働いているの

であろうか。人それぞれに「選択」をせまる強力なものがあのように思う。私の場合は、子ども時代のある経験に基いていることに気づいた。それは一九四五年の八月、広島・長崎に原爆が落とされてから終戦に至るまでの数日間の出来事であった。私は当時小学校の一年生で、家族と共に東京に住んでいた。東京の大空襲も何度か体験し、その都度、家から母や弟と少しでも煙にまかれないうでいられる空地を求め逃げ出していたのである。

ところが原爆が落とされた八月六日以降は、外に出るのは危険だから防空壕に避難しなければならないという。

それまで各家庭の庭先に掘ってつくってある小さな防空壕は家財道具を入れるのはよいが、人間が入ると空襲で大火災になった時、煙で「むし焼き」になるからだめだと教えられていたのだ。子ども心に、今度空襲になったら、自分は「むし焼き」になってしまうと思い、親たちに「どうして防空壕に入るの？ むし焼きになるじゃない。」と何度も尋ねたが、親たち大人はこの私たち子ども

の問いに答えることは出来なかった。

それから数日して終戦になり、国民学校は小学校になり、一時閉鎖されていた学校が再開され行ってみると、かつてその前で校長先生が、うやうやしく教育勅語を読んだ校庭のすみにつくられてあったお宮も天皇の御真影があるといわれ、最敬礼をしなければ通ることのできなかった御堂（何といったのか）もすっかりとり払われ、建物のあとの礎石だけが残り、まわりに敷きつめられている美しい玉砂利と共に私たち子どもの格好の遊び場になっていた。この時から私は大人の言うこと、することには矛盾があっても必ずしも信用できるものではない。子どもの生存すら保証しないのだと漠然と感じはじめていた。

その後、大学に入り、子どものことを学ぶようになってから、いろいろな幼児教育観に出会い、少しずつ自己にとり入れるようになってきているが、それらを選択する時に、この子ども時代の経験が深く影響していること

が齡を重ねるに従ってわかってくる。

大人は子どもに絶対的な価値などを示すことはできない。せいぜい価値の方向性を示す位である。むしろ、迷いながらも子どもと出会って共に新しく方向性を創っていくことが必要なのである。子どもにとって良いものは大人にとっても良いものでなければならない。何が良いものなのか、何が価値なのか。大人が子どもと共に見出し、新しく創りだしていくこと——これは大変難しいことである。よく大人が「子どものことを考えて」とか「子どもの立場に立って」子どもの為に行っていることなのだということがある。大人が「子どものことを考える」時は、あくまで、大人の立場で「子どものこと」を考えているのであり、「子どもの立場に立って」と言っても、大人は子どもの立場などに立つことは出来ない。立っているような幻想を持っているにすぎない。子どもは大人のこの欺瞞性を見ぬく力を持っている。子どもの意見を尊重しているようで、大人の方向性に合うものだけを選んでいることがある。

ある幼稚園でのことである。この幼稚園ではかねてから子どもたちが自発的に発言し、子どもたちの意見によって物事をまとめることをよしとしている。ある時、お昼の飲物を配るのに、どうしたら早く能率よく配れるかを子どもたちに話し合いをさせている。四歳児なりに活発にいろいろな意見が出る。しかし先生はなかなか子どもたちの意見をとりあげない。最後に一人の子が小さな声で言った「当番を決めればいい。」という意見をとらえて、「ハイ、Aちゃん、もう一度言って」とその子の意見を全体の中で目立たせて、結局先生のはじめから意図している「当番制」にする。その時子どもたちは、自分たちも意見をいったのに何故取り上げられないのか漠然と不満を感じていてもはっきり言うことはできない。何だかおかしいと思う。子どもたちは納得しない顔をしている。子どもたちの自主性を育てようとしながら結局は大人の方向に引張っていく。

そんなことは当り前のことだという人があるであろう。「大人は幼児に較べたら長いこと生きていて、世の

中のことをたくさん学んでいる。大人が子どもに価値を

教えずに誰が教えられるのだらう。もっと教師も親も

自信を持って教育に当らなければ……云々。最近では特に

我々戦中から戦後にかけて育った自信のない親、教師が

子どもを育てるから、校内暴力など、非行が増えるのだ

と世間の風当たりも強い。しかし少し待ってほしい。私

は大人が子どもの後からついて行って、子どもの言いな

りになることが望ましいと思っているわけではない。大

人は子どもの後からついて行ったとしても子どもが危険

な方向に行くように見えたら、やはり子どもの前に立ち

ふさがつて行手を止めてしまうであらう。あるいは、子

どもの心に沿ってついて行くのも幼児期で子どもが大人

の予測を裏切らない範囲で行動しているうちは可能で

も、青年期に近づき子ども自身の価値観で行動するよう

になった時、同じようについて行けるであらうか。又反

対に大人の方向性、大人の価値観で子どもを引張ってい

くとしても、幼児期はともかくとして青年期までそれを

維持することは困難であらう。急速な断絶がやってくる

かも知れない。

では大人と子どもが出会って、共に新しく方向性を創

り出すにはどうしたらよいのであらうか。大人も子ども

もありのままの自己をぶつけ合って進む以外にはないの

ではないか。大人が子どもを理解することは本質的には

不可能である。大人は子どもそのものになることはでき

ないので、理解したと思っていることは大人の立場で、

子どもとの関係を変えようとして少し近づいたというこ

とであらう。はじめから子どものことを理解することは

不可能だと思いつつ、それでも共に手を携えて、子ども

との関係を少しでもよくして行こうと努力することが大

切なことだと思う。そのためにはありのままの自己は大

人も子どもも出し合うことである。自分が感じている最

も重要なこと、自分が大切にしていること、自分の考え

を追究すること等である。それには大人も子どもも自己

の確立が必要であらう。子どもにとっては自己が育つ過

程にあるので、確立というところまでいかないが、各発

達段階での子どもの自己が育っていることが重要である。それを授けるのが親として、あるいは子どもの教育に携わる大人の大切な役割となる。しかしそのためには大人自身の自己も十分確立されていなければ、何故子どもにとって自己を育てることが重要であるのか真に理解することが出来ないのではないか。

ところが現代は我々大人にとっても自己を確立するのがきわめて難しい時代なのだ。自己は常に関係における自己*であって、他者との関係、自己自身との関係、物（有機的、無機的）との関係を担っている自己であるから、これらの関係にどのように自己がかかわることが自己を確立することになるのか。人が他者との関係で、真にその人を尊重し、かつ自己を大切にしようとするならば、支配したり支配されたりすることなく、又一方が他方の犠牲になることなく、互いに生かされ合う関係になるであろう。今、我々大人の世界で、真に互いに生かされる関係を創り出すことが如何に難しいか。個人と個人との関係では可能であっても、個人と組織（あるいは集

団）となると又一層困難となる。個人が集団に埋没していれば、一見平穩無事に過ぎるかも知れないが、一旦、集団の中で個人を生かそうとすると様々な軋轢や障害が出てくることが多い。又物との関係でも人は自らの創り出した物質文化に押しつぶされそうになり、物の法則に振りまわされて自己を見失いそうになっている。人がどのような状況においてもこの自己も人も、物をも生かせるかわり方が出来ることが真に自己が確立している状態といえる。

こうして大人が真に自己の確立をしていれば、子どもの自己を尊重することの意味を捉え、子どもの自己を育てることに努力を惜しまないようになるのではないか。子どもの自己が育つということは、子どもなりに自分の要求、自分の意見をはっきりと持つことである。この点、我々日本人は日本語によって小さい時から育っているのに、主語をはっきり示さなくとも通じてしまうことが多い。それだけに誰がどう思っているのか、関係の中できわめてあいまいになってしまいうことがあり、自己が

育ちにくい面がある。子どもが小さい時から、「あなたは、どう思うの？」とたえず聞かれる場合とは異なる。

それでも大人は子どもの自己が十分に表現され、発揮できるように育てることが重要であろう。幼児期から子どもが、常に自分はどう感じ、どう思っているのか表現できるように大人が授け、働きかけることである。又大人も子どもに自分の感じていること、どうしても大人として譲れないことについて、自分はこう考えているということ子どもにごまかさずに、辛抱強く言いつづけることである。大人も子どもも自己が確立していれば、ぶつかり合っても互いに、他者の自己の存在に気づき、妥協点を見出し、自己とはちがう他者、多様な価値観との共存を認めることが可能になるであろう。ここに大人と子どもが出会い、新しく共に方向性を創り出していくことの可能な関係的基盤ができるであろう。

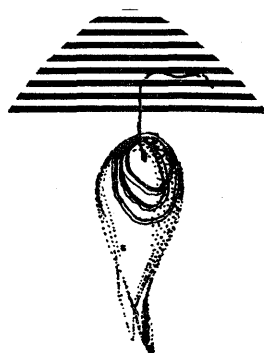
私は幼児教育に携わる人にとって重要なことは、子どもについての理解だけではなく、如何に子どもにかかわ

る自己があるか、あるいは単に子どもだけではなく、子どもをとりまく世界に自己が如何にかかわるかを捉え、実践することであると考えている。

(立教女学院短期大学)

* 元お茶の水女子大学教授 松村康平氏によって創始された関係学の立場による自己のとらえ方である。

** 同じく関係学ではこれを自己・人・物の接在共存状況という。

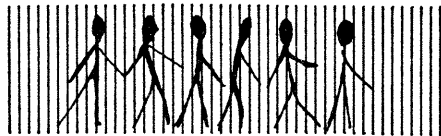


家庭での教育と幼稚園の教育

日頃よく母親たちから「家では中々言うことを聞かないのに、幼稚園の先生の言われることはどうしてよく聞くのでしょうか。」と訴えられます。これは幼稚園という集団の場に入ると「友達と一緒にするんだ。」「みんなもしているから僕もがんばらなくては……。」と周囲につられて、子供ながらに甘えの心を押さえて自己を律して行動する為に、家より一段とよい子にできる結果だと思えます。だからといって

並川 明子

家庭教育をすべて幼稚園が代ってするということはできません。本来家庭で指導するはずの基本的生活習慣については、幼稚園でももう一度徹底しながら十分身につくように力を入れて指導していますが、それをよい事にして家庭で躾の手をぬくようなことがあっては困ります。園と家庭でよく連絡しあって、これらの躾や教育に行き違いのないように進めることが大切でしょう。



それでは家庭でなければならない教育とはどんな事でしょうか。幼児期にはまず生活習慣の確立に始まり、食事の作法、言葉使い等の躰の面と、お手伝いなど役割分担をさせることで家族の一員としての認識をもち、家族同士の親愛の情や尊敬の念など自然と身につくように導くことが大切です。それに感謝の気持、正直な心、思いやりの情など人間として生きていくために最も大切で基本となる心を育み、大宇宙の大きい力に対する敬虔な心（宗教心）を持った人間に成長するように心をくだいて導くことこそ家庭教育でなければできない大切な目標だと思います。これらを達成するためには、毎日の生活の中でこまごました具体的指導が必要ですが、一番大切なことは、両親が信頼しあい尊敬しあって、一生懸命生きている姿を見せることと、子供の健やかな成長を見守り、日々祈りの心で接すること、この二つの実践が正しい家庭教育を支える大切な柱となると考えます。

幼稚園教育の目標は、大勢の友達と一緒に話を聞き、それを自分なりに理解し、自分の意見も集団の中で発表し相手に気持を伝え、友達との交流を通して協調することや競い合うことを学び、社会人として成長していく事ではないかと考えます。喧嘩してぶつかる事で人の心の痛みもわかり、思いやりの心が育ったり、運動会や発表会などの行事を通じてやりとげる粘りの心も育つことでしょう。音楽や絵画製作や劇あそび、それに戸外の運動あそび等、すべて大勢の友達と共に遊ぶ事により諸々の感覚が磨かれ、知らぬまに身体の諸能力が発達していきます。このように幼稚園では遊びを充実させることにより、知情意の調和のとれた人になるよう導くことが大切な目的であると考えます。

近年、中学・高校生の非行が社会問題となっていますが、暴力を振ったり問題行動をする子供の年令が段々低下して、今や中学・小学生におよんできたと言われ、その原因は過保護や過干渉による幼

時期からの育て方に問題があったと発表されています。この子等を育てた親たちの幼時期を見ると第二次世界大戦の前後に生まれ世情は混乱し、経済的にも厳しい時期で、学校でも社会でも家庭でも落ち着いた教育を受けられない状況でした。自分たちの恵まれなかったつらい思い出の反動として、せめて可愛い我が子には充分の事をしてやりたいと願い、小さい時から欲求をできるだけ叶えてやろうと努力したのではないのでしょうか。その上世の中の風潮も所得倍増にうかれ、消費は美德などと景気のよい時代で、辛抱することも少なく幼時期を過ごした子供たちが成長して非行に走るようになったのも無理からぬことだと思えます。昔から三つ子の魂百までと言われてきたように、幼時期にどのような環境でどのように育てられたかによってその人柄もつくられることを考えれば、両親の育児観とその態度が一番大切です。

私は昭和二十四年より幼児教育にたずさわってき

たので時代により少しずつ母親達の考え方や態度が変化している事を感じてきましたが、数年前より若い母親の教育観や生活態度に大きい変化があらわれてきたように思います。例えば幼稚園や小学校の役員になると、種々の会合などに時間をとられるのでこれを嫌がり、選出する時期だけパートタイムに出るなどして口実をつくり、役員を逃げようとする人が多くなりました。そして余暇時間を気の合った友人とバレーボールやテニスを楽しんだり、スイミングクラブに入ってエンジョイする等自分の生活をまず優先させています。特に最近の若い母親は自分の考えを論理的に主張し、遠慮とか控え目な態度が少なくなってきました。これらの変化をすべて悪いと決めつけることはできませんが、人の為に働くことの喜びを親自身が拒否するような生活態度は、子供たちにとって一番の教育者である親として少し問題ではないでしょうか。

また、両親教育こそ大切だと幼稚園や学校で計画

を立てても、テレビ等で有名な講師には集まりますが、地味な講師の講演会などには進んで参加しようとしません。これは母親たちが大学や短大卒と高学歴になってきて、学習に対する飢餓意識が薄れてきたせいもあるのではないかと推察します。しかし母親の学歴が高くなるにつれて、子供の教育が立派にできるようになったかという点、首をかしげざるを得ません。ある母親は「子供は自由にのびのび育てよ。」という説をはき違えて、全く放任して育てて、人の迷惑も考えず行儀の悪い乱暴な子にしてしまったり、反対に過干渉で、親の顔色ばかり見て行動する依頼心の強い子にしてしまったり、何事も理屈で教えて、こましゃくれた屁理屈ばかり言う可愛くない子に育ててしまったり、こうした問題を持った子供が、三・四才になって初めて社会生活を始めるために入園してくるので、幼稚園の受入れは大変です。中にはすぐに友達をつくり活発に遊んだり、先生の話もよく聞いて意欲的に行動する子供もいます

が、中々親から離れられなかったり、やっと離れても友達の中に入りにくくぼんやりと傍観していたり、何事にも意欲を示さず、集中力が無く自分勝手な行動で集団を乱す子など、それまでの家庭教育によって様々の習性や個性が育ってきています。

そこで、入園前の面接や発達テスト、入園直後の家庭訪問や生育歴調査等で子供の実態を把握し、入園後に集団の中で示す行動と重ね合わせながら幼稚園での心の状態を推察して、その後の指導について適切な目標と方法を考え日々の保育の中に織り込んでいきます。しかし始めに育て方を誤った場合、多くの努力を重ねても矯正することは中々大変で骨が折れます。どのようにしたら理想の教育ができるのか、現代色々の説が発表されるので、経験の少ない親たちにとって、どちらの意見が正しいのだろうと迷ってしまう事もあります。核家庭の多い昨今、若い夫婦に子供の教育について教えてあげる社会教育の場が必要です。保健所ではこれまで健康面

に力を入れて指導していますが、今後は乳幼児の知的発達や情緒の発達など心の面にも正しい育て方を指導してほしいものです。

理想的には結婚前から「良い家庭とは」「夫婦のあり方」「正しい子育て」など学ぶことが良いのですが、子供が生まれる迄は一般にそちらに心が向かないようです。そこで私は妊娠中もしくは乳幼児を育てている若い母親が気軽に学んだり相談できるようにと考えて、昭和五十四年より幼稚園に併設して母親教育を目的に幼児教育センターを設立しました。ここでは毎月講演を聞き各方面の講師から幅広く正しい教育について学んだり、子育ての悩みや不安について相談にのったり、各種テストを希望者を実施して発達状況を正しく把握し適切な助言を与えたりしています。講習会も毎月内容を変えて開催し、親子体操・親子水泳・手作りの玩具・子供のためのお菓子や料理の作り方等指導しています。入会は幼稚園の在園に無関係なので、広い地域から希望者

が勉強に参加している現状です。親たちの希望により二才児を持つ会員で希望する者は、週一度集まって、子供同士一緒に遊ばせる機会を持つようになっています。三年の経過を見ると、一生懸命参加して正しい育て方を学んで来た母親たちは、子育てに気負いがなくなり、明るく取り組んでいるので、その子供たちは落ち着きがあり遅く育ってきております。そして母親が講演をきいている間はその横で静かに遊んでおり、会員外の子供たちと異なって走りまわったり大声をたてて騒いだりすることが大変少ないのです。中にはダウン症や言葉の遅れ等、問題をもった子も入会しますが、少しずつその症状が良くなって、普通の幼稚園へ入園できそうになるまで成長してきました。この様子を見ると胸のふくらむ思いがして、小さなセンターなので公費の助成も全くなくて、毎年赤字の積み重ねではありますが、今後もがんばって子供たちが立派に育つお手伝いをしていきたいと願っております。(和弘学園)

私のアメリカ体験記

——現代アメリカにみる親子の世相——

進藤君枝

アメリカ……「病める大国」アメリカ社会は何かが変わろうとしている。変動・苦悩するアメリカの様子は、いろいろとマスコミでも取り上げられている。そのような時に、私は北米の小さな田舎町で一年間生活する機会を得ることができた。アメリカを知ろうとしても、アメリカは広大であり、地域や生活する社会環境においてアメリカのとらえ方は、全く異なってくる。ここではささ

やかな私の経験ではあるが私のアメリカ生活を通して感じた驚き又疑問などを綴ってみたい。

《私のすごしたレディスマスの町》

ミネアポリスから車で三時間半、シカゴから車で七時間の所に位置している、一年の半分は雪にうもれ雪解けと同時に美しい草花が花開く森と湖にかこまれた人

口二〇〇〇人の美しい町である。私はその町にある学生数四〇〇人弱の大学に二学期間籍を置き寮生活をアメリカの若者達とすごした。

学生生活を通して感じたこと

マウント・シナリオカレッジはプライベートな文科系の大学である。その中の幼児教育専攻のコースを私は受講することになった。

このコースは、多くて十五名、少ない時は私を含めて二、三人の学生で講義がもたれた。主任教授 Dr. ジャナシュは、日本で一年間の生活経験をし、日本文化・又日本の教育に大変興味をもっていた。授業の中で、アメリカの母親と日本の母親との相違を学生に語ることがよくあった。その中には、日本の母親の姿をアメリカ女性の目でとらえ、とかく私達が古い思考として現代を生きている若い母親からは、切りすてられている部分に注目があてられていることが多くみられた。Dr. ジャナシュは、毎回講義をはじめの前には必ず学生一人ひとりに声をか

け、学生の様子を問うことがあった。Dr. ジャナシュは、最近の学生達の生活環境の急激な変化に驚きの目をもち、その原因は何であるかをさぐるうとしていた。

あるクラスの十五名の女子学生の中には、十二名の子供を持つ母親がいた。そのうち九名の学生は、現在子供の父親と生活していない母親であった。この学生達の年令は若く、多くは二十才以前に母親になったものが多くみられた。私の親しくしていたアニタも、二十五才で七才の女兒を持ちながら勉強を続けていた。娘の父親とは五年前に離婚したとのことである。彼女は学校を卒業したら自分の生まれた南部の町に戻り、プライベートのデーカー・センター（託児所）をつくるのが夢であった。

年令のいった小柄のキャッシーは、中学生の女兒を育てながら学校に通っていた。三年前に離婚をし男児を父親に渡し、自分は娘と一緒に生活していた。心理学を専攻しているキャッシーは、カウンセラーになることを目的として勉強をしている優秀な学生であった。娘はハイスクールを終えたあと、夜の講義を受ける母親を待った

め、一緒にキャフテリアで簡単な夕食をとっている母娘を私はよくみかけた。

アニタやキャッシーのように、子供を一人で育てながらなんとか卒業の資格をとろうと一生懸命勉強している母親達がいる。しかしその反面同じような型で子供を持ちながら、日中は子供をデーケア・センターに預け、卒業の目的もなくただ学生という名のもとで学生生活を楽しんでいるかのようにおもえる母親もみられた。アメリカ入りをした当初、彼女達の余りにも自由な生活様式をみていた時、いったい彼女達はどこから生活の糧を得ているのか疑問を感じた。彼女達は、政府から与えられるフードスタンプ（低所得者等にあたえられる食料購入券）等の政府からの援助を受けていることを知った。

Dr. ジャナシュは、この二、三年幼児教育を専攻する学生の中にも多くの離婚経験者が増えている傾向にあると語っていた。子供を育てることにより幼児教育のむずかしさを知り、学校に戻り勉強をしようとする学生もみられるがその反面学生の中にも子供をもってはいるが母

親としての自覚が薄い若い母親達が多いようにおもえる」と嘆いていた。

又私のとった他の夜のクラスには、キムというブロンドの髪の毛の美しい学生がいた。彼女の両親は何年前かに離婚をし、両親はそれぞれ再婚をし兄弟姉妹はそれぞれ別々に生活していた。彼女は一人暮らしの田舎の生活にも疲れ次の学期からは大きな都会の大学へ移ろうとしていた。特に Dr. ジャナシュは、彼女を支えることのできる友人、家族がいなかったためなんとか彼女の相談相手となり彼女が希望をもってすすめる道を捜そうとしていた。

Dr. ジャナシュは「幼児教育の講義をすることも私にとって大切な仕事です。しかし子供を育てながら一人で生きている女性、キムのように戻る家族のない学生それぞれが多クの問題をかかえて生きているのです。今の私には、学生のためにも、その子供のためにも学生の持つ問題に耳をかたむけて一緒に解決の方向をみい出してあげることが私の大切な仕事のような気がします」と語っていた。

アメリカの学生生活の中で、私の身近な友人・知人の中に余りにも多くの離婚経験者がいるのには驚かされた。彼女達の口からはなんのためらいもなく「最初の夫・今の夫」という言葉が会話の中にされていた。それと同様子供の口からも「前のパパと今のパパ」という言葉も耳にした。友人や知人の一人一人はいろいろな理由で結婚生活に終止符を打ち子供と二人の生活を選んだことは納得できる。しかし子供が幼ない時両親の離婚を経験しその後どのようなかたちで幼児の時をすごしているのか私は今まで幼児教育の現場で仕事をしていただけに関心があった。

現在、生まれる全米の子供の四十五パーセントは成人になる前に親の離婚を経験するといわれている。Dr. ジャナシュは、このように急激に変化しているアメリカの子供をとりまく家庭環境の中で子供達の教育はどうあらねばならないか? 「幼児教育の土台は家庭教育にある」という彼女の持論の家庭そのものが失なわれている時、

どう今後考えていかなくはならないかを問いつつある時代であるとのべていた。

小さな町の幼児教育施設

- デーケアセンター(託児所)
- 公立の幼稚園 二園
- 私立の幼稚園 一園
- ヘッドスタート幼稚園 一園
- プライベートナースリー 数園

私は前期週一回デーケアセンターで観察実習を後期は公立・私立の幼稚園で実習をする機会を得ることができた。

●幼稚園を見学して

午前組と午後組とわかれている。スクールバスにのせられた午前組の園児は九時ごろに園に到着し十一時半まで保育を受ける。カリキュラムは指定されたワークブックを使用しての読み書きが主体である。ここ十年来幼稚

園において知的教育が要求されるようになり最近ではその成果の報告を義務づけられてきているとのことである。担任のミセス・ビクターは、幼児期の遊びの重要性・生活面の指導等は理想としてわかっているにもかかわらず子供達にさせなくてはならないことがたくさんありなかなか実現できない。アメリカの幼稚園児の年令は、日本でいう年長児の九月からの子供たちである。幼稚園入園前の子供はデーケーアセンターやナースリースクールにっている。幼稚園の子供達は全般的にあかるくのびのびしてはいるが、日本の平均的な同年令の子供達に比べて身近の自立にはほとんど関心のない子供が多いように私には思えた。又現場での経験の長いミセス・ビクターは近年子供達の家庭でのしつけがほとんどされておらず若い母親達の中には、家庭での教育など全く無関心の母親が多くその指導に苦労していると語っていた。

•デーケーアセンター

幼稚園が終り、母親が学生であったり、働いている子

供は直接スクールバスでデーケーアセンターに送られる。このセンターは費用は政府からの援助でほとんど無料に近く午前七時から午後五時まで開かれている。定期的につれてこられる子供や母親が外出したりする際等も自由に預けることができる。私が滞在していた時期に、カーター大統領からレーガン大統領に政権が移り、福祉の見直しがなされていた。その為にデーケーアセンターの援助の縮小問題が起り母親達の会合が数回持たれていた。

•子供の虐待

はじめての講義の際、Dr. ジャナッシュから、「日本の子供の虐待の現状について説明しなさい」との質問を受けた。はじめ私は説明の意図が理解できなかった。私は現在の日本で親が激しく子供を虐待するようなことがあったら新聞記事になりかねないというような意味の答をした。Dr. ジャナッシュはこのことや自分の体験を通して、日本社会では子供は大切に扱われ、かえって親の過保護

からくることの問題があることを学生に伝えた。それに比べアメリカ社会では、親による子供の虐待が頻繁に行なわれ大きな社会問題になっていることも授業でとりあげた。自らをコントロールすることのできなくなった親が自分の子供を傷つけることによりなんらかの満足を得ている。私も実習した園でいつも体に生傷のたえない女兒をみかけた。不思議におもい教師に質問した所、父親によって傷つけられたものであった。この女兒の父親も母親も再婚者同志であり、それぞれ二人の子供をつれての再婚であった。父親の連れた多少知能の低いこの女兒が父親から虐待される対象になっていたようである。この町の警察もこの父親の例ばかりではなく、近所の人々の通報による子供の虐待、又妻に対する虐待の問題でバトカーが出動することがよくあるようである。

帰国して思うこと

一年間の生活をふり返ってみて一番の驚きはアメリカの家庭がこわされているという現実を私の身のまわりの

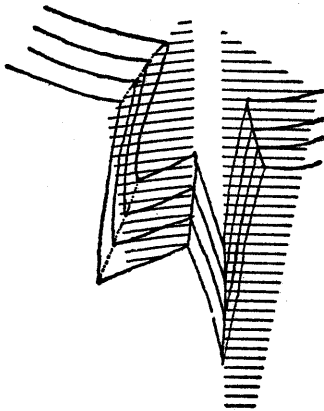
友人・知人の生活を通してじかに感じたことである。私にとつては家庭とは父・母・兄弟姉妹にかこまれた温かい社会生活を送る為の一番小さな単位だと思っている。その家庭の中ではぐくまれた幼児がはじめての社会生活を同年令の子供とする場が幼児教育施設であると思っている。幼児教育施設でいかによい方法で教育を行なったとしても、教育施設で行なわれる教育のみでは決して幼児は豊かに成長しないのではないか？ アメリカは良い面でも悪い面でも個人主義が発達している。親達の中にも多くは子供よりもまず自分の生活が第一であるという考え方が一般的であるように思える。私はある講義の中でアメリカの今日のトピックスをいくつか扱った短文を読んだ。アメリカの家族について書かれたものである。ジョン（十五才）とメアリー（十才）の両親は意見があわずいつも争いをおこしていた。その為に家庭内はいつも暗く子供達にとつても両親にとつても楽しいものはなかった。両親が話し合いをしその結果それぞれ別れて暮らすことに決定した。ジョンもメアリーも以前のよ

うに家族と一緒に暮すことを希望したがそれは無理なことであった。しかし両親がそれぞれ別々の道を歩みはじめたら両親の顔が生き生きとしてきた。それを見て子供達は私達子供のために、両親の歩む道を決して束縛してはいけないのだ。父にも母にもそれぞれの人生の歩む道があるのだから……。

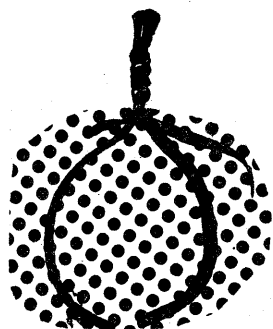
私はこれを読んだ時あらためて日本とアメリカの親子間の違いを感じさせられた。日本社会も戦後の自由な教育を受けた若者達が親となる年代にきている。アメリカのように極端ではないが年々離婚率は増加しているようである。又女性の自立が叫ばれ、かつてのように家庭を守るのは主婦の役割という考え方に変化がきている。女性が自立する為には、子育てはどうあるべきかが問われる時代である。しかし私は、アメリカの家庭がこわされる犠牲となっている子供達の姿をみた時、次の時代を背負う子供の教育の場・家庭の大切さ、子育ての重要性をあらためて痛感させられた。

近年、女性の寿命もののび、一生の間に子育てについてや

す時間は、ほんのわずかなようにおもえる。その期間じっくり母親として子供とつきあってすごすことは、母親自身にも子供の為にも価値あることではないか？ 女性の自立が叫ばれ目が社会にむけられている今、母親達に次の時代をになう子供達を育ててゆく大切さ又その喜びを私は現場を通して今後母親とともに考えてゆきたいと思っている。



エリクソンと幼児教育 (12)



仁 科 弥 生

自我同一性の障害について論じた「自我発達と歴史変動」(一九四六年)の中で、エリクソンは、強くて正常な自我同一性の形成を可能にする要因はどのようなものであろうかという問いに対して、強い自我をつくりあげるあらゆる要因が、そのような同一性の形成に寄与するであろうと答えている。そして、彼はフロイトがすでに一九一四年に「ナルチズム入門」Ⅲの中で問題にした人間の自尊心の源泉としての幼児的自己愛に言及しながら、自尊心の源泉として個人の自我同一性の発達に寄与する重要な幼児生活の条件について、次のように述べている。すなわち、自尊心の源泉として必要な幼児的自己愛を保つためには、人が生をうけた特定の社会的座標の中で生きることの素晴らしさを子どもに保証するような愛によって、環境が幼児的な自己愛を支持しなければならぬ。また、欲求不満を起こさせるような環境の要請に対抗して勇敢に戦うといわれている幼児的自己愛は、ひいては強い自我の基礎となるが、それは豊かな感性的な満足と、その同じ環境から与えられる励ましによって

強化される必要がある。子どもがもっと成長してからのこの自己愛の放棄や、より成熟した自尊心への変化の過程では、より現実的になった子どもが、それ以前に学んだものを活用しながら、しかも、もっと社会的意味のある高度な感情を獲得する機会を経験することができるかどうかをきわめて重要な意味をもつことになるという。そして、みせかけや大人のだましで養われた幼児的な万能感とちがって、自我同一性の素地となる自尊心は、自分の心身を働かせる機能的なよろこびと実際の行為とが次第に一致することを保証するような、自我理想と、社会的役割とその習熟とにその基礎をおいているとみなしている。したがって、幼児的な万能感の一部に経験を通して何らかの確認を与えるために、子どものしつけは、感性面の健康と、次第に増大する自己支配をどのように教えたらいのか、またその健康と自己支配の成果に具体的な社会的承認をどのようにして与えることができるのか、それらの方法を知らなくてはならないと強調する。つまり、彼は、従来の精神分析が見落してきた自己

愛の集団的、支持的な側面について光をあてたのである。

このエリクソンの見解は、「自我発達と歴史変動」の終りの部分、つまりその第三章「自我の強さと社会病理学」の中で述べられたものであるが、われわれはまず、一精神分析家がこのような副題を用いたことに注目しなければならぬ。なぜなら、そこには、個人の組織立った内省の試みに貢献してきた精神分析がより包括的な心理學理論へと拡大される方向が示唆されているからである。そして事実、彼はそこで引きつづいて、アメリカの黒人やアメリカ移民の二世、三世の特殊な問題、さらに第二次世界大戦が終って帰国したアメリカの退役軍人の多くが直面した困難について考察を試みながら、精神が社会的、歴史的变化の影響をいかに深く受けるかということを示明かにした。その背景には、ハーバード大学で知遇をえたマーガレット・ミード、グレゴリー・ペイトン、ルース・ベネディクト、スカダー・メキールといった文化人類学者との出会いがあった。そのことが彼の

その後の研究の方向づけに重大な影響を及ぼしたことに
ついては、彼自身折にふれて述べている。たとえば、こ
の著述以前の一九三八年に、そのスカダー・メキールが
南ダコタのバイン・リッジ保留地に住むスー族インディ
アンの子どもたちの観察へとエリクソンを導いている。

また、一九三九年にエリクソンがカリフォルニアに移動
するとまもなく、カリフォルニア大学バークレー分校
で、当時のアメリカ人類学界の長老アルフレッド・クロ
ーバーのすすめで、クラマス河口に住むインディアン
別の集団であるユーロク族について現地調査を行って
いる。ちなみにスー族は戦闘的な、野牛を追う遊牧民族で
あり、ユーロク族は高い樹木や山々によって他の世界か
ら隔絶した谷間に住む定住型の漁民であった。これらの
研究によって彼は臨床的理論に新しい視点を手に入れた
にちがいない。また、エリクソン自身、一九三三年にウ
ィーンからアメリカのボストンに移住し、一九三九年に
カリフォルニアでアメリカ国籍をえた。そしてまもなく、
自分が帰化したばかりの国が自分の故国と戦うとい

う不運に遭遇したのであった。これらの経験も人の一生
を見はるかすまたとない機会を彼に提供したものと思わ
れる。このように考えてみると、われわれの人生が歴史
の中の一こまであり、われわれは自分たちの親や社会に
対して心理学的な適応をするばかりでなく、自分が生ま
れあわせた特定の時代に対して如何に心理学的適応をさ
せられているかということを明らかにすることが、今や
彼の主要な研究テーマとなったことは容易にうなずかれ
るのである。

さて、エリクソンは、地理、歴史、経済に関する事実
と呼ばれているものが子どもたちの発達において決定的
に重要であることを明らかにした。またある集団におけ
る子どものしつけは、その集団同一性を乳児の身体的経
験に伝達し、これらの経験を通して、さらに個人の自我
の形成に寄与するというメカニズムを仮定した。たとえ
ば、スー族の人々にとって、いつの時代に、どこに住
み、何を食べ、何を生業としているかということのすべ
てが一つになって、彼らの考え方、慣習、子どもたちに

対する態度に影響を及ぼすのである。そして、スー族の男の子にとって、歩いたり、走ったりする能力は特別の意味をもつようになる。獲物を追ひ、捕獲することが一生を通じて彼らの仕事だからである。そのことは、獲物を手に入れることに関連した恐れや不安が不可避的に成長していく子どもの自我の形成に大きな影響を及ぼすということの意味する。したがって、一つの地域社会の慣習とか恐れといったものは、それらがその特定の社会や文化に対して、どのような意味をもつかという観点から考えられなければならない、ましてやそれらを単純に指摘したり、判断したりしてはならないといわしめていく。また、子どもが成長する過程で経験する葛藤は、たいていの場合、価値ある多くのものを生じさせるので、避ける必要もないし、心配する必要もない場合が多いといっている。「乳児に対する、矛盾し、道理に合わない要求のいくつかは、単なる大人の悪意や無知のしるしではなく、歴史的慣習や社会的、経済的な目的によってもたらされた結果である。」（『乳児期と幼児期初期の諸問

題』一九四〇年）とも述べている。コールズが「同一性の概念は本質的に過去、現在、未来に関する記述である」（『エリック・H・エリクソンの研究』一九八〇年）と指摘しているように、どのような人生にも、どのような「葛藤」にも、そしてどのような部族や国家にも、同一性というそれがよっている過去と、行くべき未来があるのである。

また、エリクソンによって次のような点が指摘されている。地域社会には、子どもの各発達段階で、各年齢の個人によって代表されるさまざまな役割の階層的な秩序があつて、それと調和する一つの「人生設計」に向つて子どもを方向づけようとする働きかけがある。たとえば、社会は、家族や近隣、学校などにおけるさまざまな人々との接触を通して子どもにさまざまな役割への実践的な同一化の機会を提供する。子どもは次々に継起する暫定的な同一化を重ねながら、たとえばもっと年上の人のようになろうとか、もっと幼かったときのように感じたいとかのさまざまな期待をごく幼いときからつくりあ

げようとする。それらの期待が、心理、社会的な「適合性」を保証する経験の中で一歩一歩現実のものとなるにつれて、一つの同一性の一部と化していくと考えられている。このように、同一性形成の過程においては、心理、社会的相互補完作用が大きな意味をもつことについては、先に「同一性」の概念について述べたときにすでに触れた。とくに、子どもの同一性は、その文化の中で意味のあることを成しとげることが誠意をもって、かつ終始一貫して認められることによって、はじめて真の強さを獲得することができると強調されている。つまり、

個人と社会の相互作用によって、或は相互確認の如何によって、同一性の強さが規定されるというのである。しかしこの点に関して、同一性の感覚が、ある役割に屈し、社会に無条件に順応することによって主に「達成される」という一部の人々のとらえ方に対して、エリクソンは、それは誤った解釈であり、社会との相互作用はあくまでも個人の自我の主体的機能によるものであると説明している。そして、集団同一性と自我同一性の相互的

な満ちし合いが、より大きな共通の潜在的エネルギーを、自我の統合と社会組織の双方に提供することになると考えられている。

その例証としてエリクソンがあげたアメリカ・インディアンの話を紹介してみよう。一つはババゴ族の場合である。その家の主人が三歳になる孫娘にドアを閉めるように命じたとき、まわりの大人は、幼い彼女が重いドアを閉めるのにやっと成功するまで、手を貸そうとはせず、謹厳に坐って、いつまでも待っていた。やっと閉めおわると、祖父はそこで重々しく彼女に謝意を述べたという。彼らの社会では、子どもに課される仕事は、その子どもにとって果たすことが可能なものでなければ要求されるはずはないと考えられていた。したがって、一旦、求められた以上は、彼女はあたかも一人前の女子であるかのように、それを果たす責任はすべて彼女だけのものであるとみなされていたのである。もう一つの話は、シャイアン族の男の子の場合である。男の子は走り廻ることができるようになると、彼の身丈にあった弓矢

を贈られる。そして、彼が動物や鳥の最初の獲物をとって帰ってくると、家族は、父親が獲ってきた野牛に対する場合と同じような厳肅さで、その獲物の寄進を受取り、それを正式に祝って食べるという。そして彼がついに野牛を倒したとき、それは彼が兒童期の訓練の最終段階に到達したことを意味するのであって、兒童期の経験と矛盾する新しい大人の役割を果たしたわけではない。つまり、成人してから的人生における役割と子ども時代のしつけが実にうまくかみ合っているのである。

アメリカ・インディアンは、すべての民族集団がそうであるように、自分たち独自の世界観をもっており、そして子どもたちを自分たちと同じように育てようとする。そのようなしつけが固有な慣習や儀式化した行動に発展する過程をエリクソンは描き出した。彼らのしつけについてきわだっていることは、子どもは幼い時から責任をもって社会生活に参加するようにたえず条件づけられていることであり、またそのために、子どもたちが学んだ技術や才能が何であれ、それらを試みる機会が家庭

や社会において徐々に周到に用意されていることである。たしかに未開の部族の生活においては、人々は生産源とその手段に直接的にかかわっている。彼らの使う道具は身体の延長である。彼らの呪術は身体に関する概念の投射である。子どもたちは集団の道具の操作や呪術の実践に参加する。危険に満ちてはいるが、身体と環境、兒童期と文化はすべてが一つの世界である。エリクソンは、このようなスー族やユーロク族の社会の中に「成熟した人間生活の完全な形態」と、われわれが羨望すら感じる「等質性と簡素な統合性」さえ見いだしている。しかしエリクソンは同時に、これらの部族が現在直面している新しい問題を見逃すことはなかった。スー族は白人に征服され、残酷にもブラック・ヒルズの土地や生活の手段を奪われて、世間からの隠遁生活を余儀なくされた人々である。しかし、このように部族存亡の危機に瀕した彼らではあったが、連邦政府の教育家たちの強制する定住型の生活設計を受入れようとはしなかった。そのような彼らをエリクソンは殆ど「未来」のない民族であっ

たが、しかしきわめてはっきりした一貫性のある過去をもった民族であるにとらえている。すなわち、彼らの集団同一性は彼らにとって強力な心理的現実として生きつづけ、彼らは、今日なお、過去に抱いた希望と約束とをもち続けているのである。たとえ、世界中の人々が彼らを裏切ったとしても、スー族は「遠心的」な彼らの同一性の感覚と統合の観念に支えられて、ブラック・ヒルズと失われた野牛を取りもどす日まで闘いつづけるであろうという。

われわれはここで、文化的一貫性という経験が同一性の形成に如何に重要であるかを明らかにしたエリクソンが、同時に、アメリカや西欧社会にみられる同一性の強化を遅らせる文化的障害についても鋭い観察の目を向けていることに注目しなければならない。すなわち、アメリカや西欧社会では、未開の部族とは対象的に、道具や機械が身体の延長にとどまらなくなってしまった現実がある。いや、むしろ、すべての人間的な組織が逆に機械の延長になろうとさえしている。子どもは産業社会に対

して労働力として何一つ寄与するわけではない。たとえしたとしても、子どもの仕事は、子ども自身の力量や技能に対して評価されるのではなくて、能率化された産業界の要求に基づいて評価される。子どもの家庭での仕事にしても、親の気分本位で認められたり、ほめられたりする。したがって子どもは自分が達成した結果を評価する基準など学ぶことはないのである。

文明の拡大傾向とその階層化と専門化とが進むにつれて、児童期は、一生の一つの切り離された区分となり、その区分固有の伝説や文学をもつようになった。その結果、子どもは自我の統合において、彼らの存在に関連する社会の区分以外を包含することがきわめて困難となった。この指摘は、文明が子どもに強いる一貫性のなさに対する彼ならではの批判である。(エリクソンの子ども観については、回を改めて、「子ども」という観念の歴史の中に位置づけて考察してみたいと思っている。)また子どもたちには、たしかに、現実の、或は物語の中の人物や、習慣、特徴、職業、考え方などに多少とも実験的

に自分を同一化させることができる多くの機会がある。

しかし、子どもたちが生きているこの現代という歴史的な時代は、断片的な各同一化の有効な統合を可能にするような社会的に有意義なモデルについてはごく限られた数しか提供してくれない。そこで個性豊かな多くの子どもたちは、同一化の対象を、不安定で部分的でしかも互いに矛盾しあうさまざまなモデルにしか求めるほかないというような立場に追いこまれている。神経症の子どもを示す症状で、異常に激しいむきだしの本能の爆発のようにみえるものも、実はその子なりの自我の統合の努力である場合があるという。エリクソンは、このように、社会の不連続性や、子どもとのしつけと社会の現実とのずれなどと、現代の神経症との関連性をも重要視している。そして子どもたちの生活の全領域に起っている急速な変化の統合を子どもたちに約束するような発達途上の自我同一性をわれわれが守ってやることが急務であり、また、幼い患者に対しては、基本的な自我同一性の形成を成功させるための必要条件である信頼感の確立にまず

手を貸すような治療法が不可欠であろうと述べている。

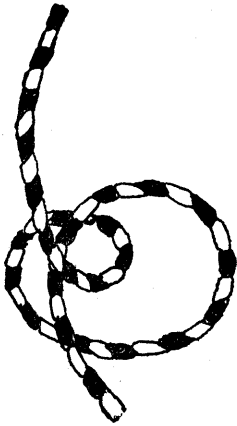
さらに、変動する歴史的諸条件から力を得ることができるとする自我同一性をつくりあげる教育には、大人が意味のある連続性の新しい基盤を子どもたちに与える努力と共に、歴史上異質なものの意識的な受容も必要であろうと提言している。アメリカの中流階級の親たちは「厳密な信頼性」や「機械的正確さ」にとりわけ高い価値をおいて、そのような「徳目」を子どもたちが生まれるとまもなく教えようとする。彼らの中には、それらの徳目が、無選択的な移民や暴力などによって脅かされていると感じているものもある。そのような傾向に対して、エリクソンは、国家としてそのような徳目を強調しない方がよいという。なぜなら、それぞれの集団は独自の価値観や育児法を維持しながらも、次から次へと確実に、アメリカ人にとけ込んでいくからである。むしろ、求めるべきものは、多くの地域に住み、多くの先祖をもち、多くの集団に属する人々が、全く同じように振舞ったり、全く同じように子どもを扱ったりしなくとも、お

互いがしっかりと共通の基盤に立っていると感じるような「より包括的な同一性」であろうと説いている。

以上のように、エリクソンは、さまざまな異った文化の中に、根本的に違ったものをみようとしたのではなく、すべての親や教師たちが子どもの発達を助けなけれ

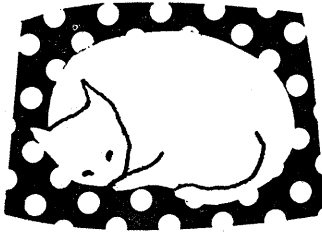
ばならない、文化を越えた共通の課題があることを、同一性形成の概念化を通してわれわれに提示したのである。

（津田塾大学）



近代短歌に現われた子ども

(六)



大塚 雅彦

(11) 島木赤彦

赤彦の本名は久保田俊彦、明治九年信州の上諏訪町の塚原家に教員の子として生まれた。長野師範に入学する前後頃より「少年文庫」等の諸雑誌に新体詩や短歌を投稿。下諏訪町高木の久保田家の養嗣子となり、師範卒業と共に教員生活に入る。明治三十六年、諏訪で同人誌「比牟呂」を創刊して編集に当る。明治四十二年、中央誌の「アララギ」と合同した。大正二年、歌の師伊藤左千夫が逝去、翌年三月、諏訪郡視学を退職、四月単身上京、「アララギ」を編集すると共に、淑徳高女に教鞭をとる。大正六年以降は東京では「アララギ」の編集者、信州では「信

「濃教育」の編集主任として奮闘した。特に「アララギ」を歌壇の中心誌に育て上げた功績は大きい。大正十五年三月、郷里の自宅で胃癌のため死去、五十一才であった。歌集は六冊あるが、終始「写生」を説き、「鍛錬道」を提唱し、晩年には幽玄寂寥の境地を確立した。万葉集研究書や歌論の著書もある。岩波書店から再度にわたって全集が刊行されている（新版へ昭44・45）は全九巻・別巻一）。

① 幼な手に赤き錢ぜにひとつやりたるはすべなかりける我が心かも

② わが側そばに子は立てりけり顔洗すすふ間まをだに父を珍らしがるか

③ 玉きはる命のまへに欲ほりし水をこらへて居よと我は言ひつる

①は大正三年作で、歌集『切火きりび』（大正4刊）所収。

「国を出づる歌」一連の中にある。前述の如く大正三年、赤彦は妻子を郷里にのこして単身出京した。出郷ということは地方在住の人間にとっては、生涯の転機にかかわ

る大事件であり、芭蕉など有名な出郷の句をのこし、

歌人では赤彦の同僚であった古泉千樫などもすぐれた出郷詠をとどめている。赤彦はこのとき既に三十九才の中年であり、実に六人の子の父であった。それだけに複雑な心境であつたらうし、並々ならぬ決意を秘めていたにちがいない。上京の直接の目的は「アララギ」の立て直しと経営のため、家庭を犠牲にして出慮したように一般にはいわれているが、親友の中村憲吉は、赤彦の上京をそのような英雄的行為視されることは赤彦の本意とする所でなく、却って赤彦が当惑するだろう、他に上京の動機には複雑な内面的事情があり、赤彦は内面的苦悶を潜めていた、という趣旨のことを書いている（「アララギ二十五周年記念号」）。戦後明らかにされたところでは、校長をしていた赤彦は部下の女教師中原（後に嫁して川井姓）閑子（本名シヅ子）と恋愛関係にあり、赤彦が信州にとどまるわけにいかない事情があつたようである（川井静子著『桔梗ヶ原の赤彦』昭和32・3等、参照）。このことは従来、謹厳一筋と見られていた赤彦の、むしろ

る人間性を語るものであろう。

それは兎も角として、出京の日の実情については赤彦自身「家を出たのは四月十日であった。湖沿いの県道には午前七時の日ざしが霜に淡すく光って居た。子供が三人後から蹠いて来た。そして一停車場の間だけ一緒に乗って別れた。子供の顔が最後に車窓の外に流れ出した時私はそこに全く信濃から別れていた」と書いているのが、①の歌を味わう参考になろう。この歌の前には「三人の子だまりてあとにつき来る湖の朝あけは明るぐるしも」という作品もある。「赤き錢」というのは銅貨である。私の子供の頃、親から貰う小遣いは赤銅色をした一錢銅貨か、多いときで二錢銅貨であった。(赤彦の明治四十五年作に「大槻の冬木の家に灯ともして銅の錢かぞへけるかも」という歌もある。)前田透教授は「幼い子がいつまでも道を追ってくる。それをかえすためにその手に一枚の銅貨を握らせたのである。視学の職を捨てて、前途さだかでない文芸の道へ突進せざるを得ない生き方を自ら怒る気持もあったろう。それが子への愛憐の思いと重

なってへすべなりける」と詠歎したのである」(斎藤

史・前田透編『短歌読本 家族』昭56・10)と述べ、また、加藤晋一郎氏は「まわりの雰囲気のかたさに何かただならぬ物を子供心に感じとって、黙しつつ父の後に従う。そんな子供達を見るに忍びず、かと言って慰むべき何の言葉も見当らず、へ赤き錢ひとつやりたる」ことで自分の非の代償としている赤彦の姿は、全くへすべなりける我が心かもであったことだろう」(加藤編『信濃の赤彦——赤彦の寂寥観(上)』昭46・6)と、やや違った鑑賞をしている。ちなみに、追ってきた「三人の子」というのは、六人の子供のうち、年長の政彦・はつせ・健次の三人であろうか。「湖」はもちろん諏訪湖である。

②も同じく大正三年作で『切火』所収。その夏帰省した折の作品である。久しぶりに帰って来た父を慕って、父にまつわりつく子供の姿を生き活きと描いている。三句から結句にかけての表現は絶妙である。「珍らしがるか」の「か」は感歎の助詞。「ちちのみの父帰れども寂

しきか子はものを言ふ父の膝に来て」（大正四年作）という、やや違った作品もある。

③は大正六年作「逝く子」一連の中の一首であり、歌集『氷魚』所収。末尾には「大正八年成る」の注記があるが、この歌のモデルの長男政彦の没年によって六年作としたらしい。「病むこと十日。十二月十八日午前零時半小石川病院に逝く」の詞書がある。急性盲腸炎で入院、腹膜炎を併発して逝去、十八才であった。この政彦は明治三十三年生まれだが、満二才足らずで生母うた（赤彦の先妻）に死別した薄倖の子であったばかりでなく、病弱でもあったようで、その病気のたびに赤彦は格別の憐愍の情を注いで歌を作っている。例えば明治三十七年には「児の眼病三月に亙りて未だ癒えず。悲しみて詠める」の一連があり、三十九年には政彦の眼病再発やジフテリアに心痛する「歌日記」の一連、更に大正二年には「子の眼病に重大なる疑問を宣せられて直に東京に向ひぬ（下略）」の詞書のある「病院」の一連等があり、この大正二年作の中には「父はけふ国にかへると聞きわ

けし幼き顔を見てやりにけり」のような佳吟がある。③は遂にその子が若い生命を終ろうとして、死の直前に（「玉きはる」はいのちの枕詞）欲しがった水を、父親の自分は「がまんしなさい」と言ったその苦しい胸中、医者者の指示か何かによって末期の水をすら与え得なかった一見非情なその行動に堪えがたい思いがしていることを、抑えた表現で詠出している。本林勝夫教授は「嘆きの声を押えることによって嘆きのふかさを訴える——それが赤彦の歌の特色であった」（本林、前掲『現代短歌』）と述べているが、至言であろう。この歌の前後には「幼きより生みの母親を知らずしていゆくこの子の顔をながめつ」「田舎の帽子かぶりて来し汝れをあはれに思ひおもかげに消えず」等の作品もあり、赤彦の慟哭を知ることができる。

④今日受けし試験危しと来て告ぐる子どもの顔は親しきものを

⑤土の上に白き線引きて日ぐれまで子どもの遊ぶ春となりにけり

⑥隣室に書よむ子らの声きけば心に沁みて生きたかり
けり

④は大正八年作で、「三月」という題の一連の中に
ある。『氷魚』所収。歌意は明瞭である。「三月」の試験
期、受験する子どもも、また親もピンと神経を張りつ
めている季節である。そんな折、今日試験を受けて来て
「お父さん、今日は出来なかったから駄目らしいよ」と
淡々と告げる子に、心配していた親の作者の方がガッカ
リしながらも、子どもが深刻になっていないのに、むしろ
ホッとしている。そんな親子の心理が微妙にうたわれ
ていて、かすかなユーモアすら漂っている歌。「ものを」
の「を」は詠嘆の助詞。

⑤は大正十二年作で「春」一連の中にある。歌集『太
虚集』所収。春の来るのがおそい信濃路——しかし、漸
く此処にも春が来たのだ。それを何よりも先に感じて行
動で現わすのは子どもだ。地面に白い線をひいて遊戯を
して、日ぐれまで遊ぶ子ども。ああ春なのだなあ。——
そんな意味でもあろうか。この遊びは次の歌の「春はま

だ土踏む足の冷たからむ草履がくしを子らのして居り」
からすると「草履がくし」らしい。いずれにしても子ど
もは遊びの天才だ。信州出身の古島敏雄博士（東大名譽
教授）は近著『子供たちの大正時代——田舎町の生活
誌』（昭57・5）に於て、郷里飯田地方にあった子ども
の遊びのさまざまを克明に述べている。しかし現代では
地面の遊びや野の遊びは子供たちから次第に失われてゆ
くようだ。

⑥は人口に膾炙した名作で、教科書にも多く採用され
ている。大正十五年作で「恙ありて二」の中の一。歌
集『柿蔭集』所収。「心に沁みて」は「切実に」「しみ
じみと」の意。「生きたかりけり」の「けり」は詠嘆の
助動詞。この年三月に死去した赤彦の最晩年の病床詠
で、「二月十三日帰国晝夜痛みて呻吟す。肉瘦せに瘦せ
骨たちになつ」の詞書があり絶詠の一つといつてよい。
この歌では隣室で声を出して本を読んでいる子供たち
は、幼い子供のように感じられるが、この「子ら」は当
時十六才になっていた夏樹（四男）や十八才のみを、（三

女)を指すようで、そうだとすれば一般の解釈にみるような無邪気な声ではなく、むしろ父の病気をはばかっているひそやかな声であり、それが却って作者の心を堪えがたくしているとみるべきである、と本林勝夫氏は述べている(本林、前掲書、及び『現代短歌評釈』昭41・2所収、本林「島木赤彦」)。前に挙げた落合直文の「父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり」によく比較されるが、赤彦作の方が切実性が溢れ、優れているよう。

(12) 中村憲吉

憲吉は明治二十二年、広島県双三郡布野村に生まれた。県立三次中学、七高を経て東大経済科卒業。大正五年郷里に帰り、家業の醸造業に従事する。その後一時、郷里を出て大阪毎日新聞記者となったが、大正末年に家督相続のため再び帰郷。肋膜炎を病み、昭和九年、転地先の尾道市で没した。四十五才である。作歌は明治四十

二年伊藤左千夫門に入り、「アララギ」の幹部として終始した。歌集は五冊。岩波版『中村憲吉全集』全四巻(昭12-13)があり、『中村憲吉全歌集』(昭41、白玉書房)もある。彼は自らの作歌について「拙修」の道と称し、苦吟したが、早くから鋭敏な感覚にすぐれたものを見せ、次第に写生的な深みを加え、静謐にして醇厚、幽微な調べをもつ作品を多く生み、その詠風は高雅清澄、気品にみちていた点では歌壇でもあまり類がない。

① 麗はしき日向へつれぬみどり児の柔頬は透きて血潮さすみゆ

② 秋されば孫にも米を背負はしめ山の家より人きたりたり

③ 父われの世わざに迷ふ寂しさを知らざる子等の手をひき遊ぶ

④ 父君を嘆きあふ子よさきはひは昨日にありて今日に失ふ

①は大正六年作で「初笑」と題する八首中の歌。第三歌集『しがらみ』所収。「一月二十四日。長女生る」の

詞書がある。この娘は良子（長じて安田家に嫁す）で、初の子どもであったので、ことさら可愛かったのであろう。嬰兒の柔らかい頬が透いてあかい血潮がさしている、という表現は実に鋭敏な感覚で、乳児のみずみずしい桃のような頬が陽の下にかがやくのが眼に見えるようである。憲吉は前述の如く早くから繊細な近代感覚にすぐれ、官能的ともいえる程の把握に長じていたこと、大正三年作の「篠懸樹^{アサギ}かげ行く女^こらが眼蓋^{まぶた}に血しほいろさし夏^{なつ}さにけり」のような歌があることでも知られるのである。

②は大正七年作で「寒しぐれ その二」の一連中にある。やはり『しがらみ』所収。大正五年十月、郷里からの督促により、都会生活を捨てて帰国して家業に従事することになった憲吉は、狭い田舎の寂しさや家庭の煩累や土俗の因襲や人間関係の面倒臭さの中に苦痛を感じたが、一方では日を経るにしがって村人たちとの接触も深まり、彼等に親しみを抱くようになり、素封家の旦那（地主でもある）として彼等と交わり、「真意義ある人間

社会生活は田舎で感得することが出来るのである」（『しがらみ』編集雑記）と考えるようにすらなった。したがって、小作人の生活などにも深い関心を持ち、その行動を描く歌を作ったりする。②は老いたる小作人が、幼ない孫にも米を背負わせて山の家からやって来たのを詠じたものであることが、この歌の前後の作品で知られる。

「純朴で律気な山の小作人のふるまいに對する感動をこもらせている」（木俣修、前掲『近代短歌の鑑賞と批評』）のである。なお、「酒買ひに朝早くより来る子あり徳利を抱きて震^{ふる}へたるあはれ」という歌も『しがらみ』にあり、貧しい山村の、飲んべえの父親を持つ子のあわれさのようなものが滲み出ていて、こんにち読んでも考えさせる内容ではあるまいか。

③は大正十年作で、「折にふれ」八首中の歌である。やはり『しがらみ』所収。大正九年三十一才の頃、憲吉は郷里を再び出て、兵庫県西宮市外に居を定め、関西方面に職を求めたが、なかなか見つからなかった（翌十年十一月、前述の如くやっと新聞記者の仕事に就く）。職な

くて居たわけで、この歌はそんな折、「父である自分が、如何なる生業に就こうかとして迷っている、この寂しい気持を少しも知らないでいる子供らの手をひいて遊んでいた」「妻子とともに一借家に住み、自力の生活を未だ立て得ないで、徒食を敷いた歌である」（高田浪吉『歌人中村憲吉——その短歌作品』昭13・11。一首にえも言われぬ哀調がある。なお、これに続いて「この子らをはぐくむ我と思へばあに生業のなき父たりなむや」「松の根に躓きつまづく児の手ひき現身われはさみしくもの思ふ」等の作品がある。

④は昭和九年作で「御遺族」という小題のある一首。憲吉没後に刊行された遺歌集『軽雷集以後』所収。「アラギ」派の歌人（歌集『寒竹』がある）であり、画家であった平福百穂画伯は、憲吉が最も敬愛し信頼する仲間であり、先進であった。その百穂は昭和八年十月、郷里の秋田県に帰り、横手町で急逝した。憲吉のなげきは大きかった。同年「悼平福百穂畫伯」八首をつくり、翌九年にも「平福畫伯を悲しむ」三首をのこしている。自

らも病床にあった憲吉のこれらの挽歌は、深い悲しみを湛えた真情流露の作品であるが、④ものこされた遺児たちを思いやる憲吉のやさしさが溢れており、「さきはひは昨日にありて今日に失ふ」という表現が、無常迅速、諸行無常の思いをみごとにとどめている。私が早くから愛誦して来た大好きな歌である。なお私は先日、松本幾世著『回想 平福百穂先生』（昭56・3）の出版記念会の折、この百穂の遺児たちの長じられた姿に接し、話し合うことが出来たが、「この人達が憲吉のあの歌のモデルなのか」と思い、感無量であった。

（お茶の水女子大学）



初代編集者東基吉を通してみる

『幼児の教育』創刊の時代（上）

国 吉 栄

はじめに

『婦人と子ども』を創刊号から一頁ずつ、楽しみながら繰っていくと、その歩みの移り変わりの様が自然に伝わってくる。雑誌とは不思議なものだ。おびただしく雑多なものが丸ごとつめ込まれていて、その豊かさは一般書籍の比ではない。発刊当時には気にもとめられなかったであろうことが、後に振り返ってみると、時間を経たが

ゆえに一層鮮やかに浮かび上がってくる。何と良い過去への導き手であることか。

私たちは言葉を使う時、意識的、無意識的選択を行っている。書かれた文字になると選択は一層顕著になる。あるものが表現された時、その背後には常に表現されなかったものが存在するのである。一方読み手は、広げられた言葉の網目から意味を拾おうと試みる。その結果、

読み手の側が、表につなぎ止められたもののどれを選択するか、つなぎとめられなかったものをいかにすくい上げるかによって、それらが語るものは異なってくる。それが実は、ほとんどあらゆる学問が共通して持っている課題であり、またおそらくは楽しみであるとも言えるのではないだろうか。研究者自身が生かされるのは、まさにその点であろうから。

『幼児の教育』は明治三四年創刊以来今日まで、ほとんど休まず発刊されてきた希有な雑誌である。八十年になんなんとする歳月はそれだけで何ものにもかえがたい力である。しかし、明治以来の歴史と、掲載論説の多くが、各時代の保育界のオピニオン・リーダーたちのものであったがために、かえってその「読み方」「読まれ方」が限定的なものになってきたくらいがある。しかし今、高く積まれた合本の山が語るのは、むしろ、雑誌が偶然に今日まで伝えてしまった無意識的な雑多なものの方であらう。

雑誌は、生きて読まれていた時代のものである。雑誌自身に語らしめることによって、雑誌のその時代における意味、掲載されたものの意味、そして、時代そのものが明らかにされるのではないだろうか。それによって、あるいは今までとは違った雑誌像・人物像・時代像が出てくるかもしれない。

私はこのような観点に立って『幼児の教育』創刊の時代を、「初代編集者」東基吉に焦点を当てて、再現、再考しようとした。

I 節 創刊をめぐる疑問

第一章 「初代編集者」東基吉

東基吉ははたして初代編集者か

東基吉が雑誌『婦人と子ども』（『幼児の教育』の前身）の初代編集者であったことはよく知られている「事実」である。しかし、東基吉の同誌における位置は、実はそれほど明確にされているわけではない。東基吉と『婦人

と子ども』の関係について述べたいくつかの研究書に見られる微妙な違いがそれを示している。

例えば、「明治保育文献集」別巻に収められた「幼稚園保育法解説」⁽¹⁾には、「……彼（東基吉）の研究は着々と『幼稚園保育法』の完成へと進められるとともに、一方において広く保姆や母親たちを啓蒙するために雑誌の必要を感じ、フレーベル総会にはかり、機関誌『婦人子ども』を発行することとなり、彼はその編集責任者となった……」とあり、東は雑誌発行の発案者として、また編集責任者として位置づけられている。

また、同書の『幼稚園摘葉』解説⁽²⁾では、「……彼（中村五六）は明治三十一年（三十三年の誤植であろう）東京女高師教授となった東基吉を幼稚園批評係として迎え入れ……、「フレーベル会」の機関誌『婦人子ども』の編集にあたらせたり……」となっている。ここでは、『婦人子ども』編集に当たったのは東であったが、雑誌発行の発案者もしくは責任者ではなかった、と言っているように思われる。

津守・久保・本田共著『幼稚園の歴史』には、「この雑誌の計画・発刊・そして編集に直接携わったのは、当時東京女高師（助）教授であり、附属幼稚園批評掛を兼ねていた東基吉である……」「……このような状況にあつて、研究や意見の発表機関をもつ必要を感じ、東基吉が中心となつて、フレーベル会の機関誌とし『婦人子ども』を明治三十四年に発行することになったのである」⁽³⁾とある。ここでは、『婦人子ども』の計画・発刊・編集に直接携わったのは東基吉であつたと明言されている。「直接」と、ただし書きとも思われる言葉が書かれているのは、「名目上はともかく、実質的には」という意味が含まれているのかもしれない。

これらの文献に見られる微妙な違いは、どこから来ているのであろうか。

『婦人子ども』創刊の事情は、『幼児の教育』第五〇巻一一号（昭和二六年）に、「婦人子ども創刊当時のこどもと其頃の幼稚園の状況に就いて」と題して、東基

吉自身によって次のように語られている。「(正しい幼稚園教育思想を一般に普及させるといふ念願を達成するためには) 自分の手に研究なり意見なりの発表機関を持つて居なければなりません。其処で考え付いたのは、当時存在して居たフレーベル会……の機関雑誌を発行することでした」。「そこで私は、明治三十四年のフレーベル会の総会にこの機関雑誌発行の案を提出しました」「夫から雑誌発行の条件は次のようでした 一、編集一切は私が担当する……」(傍点筆者)。東はこの回想記の中で、以上のように、自分が『婦人と子ども』発刊を發案した(中の少なくとも一人である)こと、また、その初代編集者であったと述べている。

東のこの回想記は、『幼児の教育』の歴史にとって非常に意味深いものである。なぜなら、これこそ、他ならぬ『幼児の教育』自身が、初代編集者の名を明らかにした最初だったからである。創刊から実に五〇年を経ての発言であった。東在任中には、奥付はもちろん、文中にもでてこない。東のこの回想記以前に「編集者東基吉」

を述べたものとしては、倉橋・新庄共著『日本幼稚園史』所収の下田たづの手記があるが、先に引用した研究書は文面からみて、いずれも多かれ少なかれこの東の文に拠っていると考えられるのである。「初代編集者東基吉」は、主として東自身の回想記という淡い土台の上に成り立っていると言える。

雑誌に聞く

とは言え、『幼児の教育』創刊五〇周年に当たって、同誌編集部が東に前出の原稿を依頼したことそのものが、東が初代編集者であったことの不動の証しであるとも言える。しかしここでは、東が編集に携わったと考えられる創刊号から第七巻あたりまでの誌面そのものから、東基吉の同誌における位置を明らかにしてみたい。東の誌面への現れ方でとりわけ目をひくのは、彼が幾つもの筆名を使っていることである。はっきりしているだけでも五つある。筆名の多さは、同誌に対する意気込みの大きさ、また多様な関心を示していると言えるだろ

う。と同時に、筆名は、本名を表わさないという働きを担っている。

なかでも最も多用されたのは、〈牧羊〉あるいは〈東牧羊〉で、この筆名で著わされた文だけでも本名で書かれたものより多い。この筆名で東は、「読書につきて」

(三巻二・三号)、「安井河野二氏を送る」(四巻二号)、「

家庭と蔬菜栽培」(六巻八号)など、かなり自由に題材を拾って書いており、この筆名の中に「編集者」の姿をみることができる。中でも五巻一号の「第五歳を迎ふ」

と題する文は、特に「編集責任者」としての東の立場を鮮明にあらわしているといえる。この種の文は、同誌五

〇巻を記念して書かれた「幼児の教育半世紀の辞 本誌主幹・倉橋惣三」(五〇巻一二号)にみられるように、本来、主幹の立場にいるものが書くのが通例であろう。

この時、主幹は中村五六であるが、「第五歳を迎ふ」という文が、〈牧羊〉すなわち東基吉によって書かれているということからみて、東が役名を持たないにもかかわらず、編集者であるばかりか、実質的には主幹にかかわ

る仕事も分担していたと考えられるのである。ただし、その署名が「東基吉」ではなく、小さな括弧入りの〈牧羊〉であった点に、影の働き手としての東の姿を見ることができよう。

同誌に最も早く登場した東の筆名は〈撃水生〉であった。東はこの筆名で、創刊号から三巻まで折にふれて「英語俚諺解」「読書余録」と題する連載や、随想、訓話を書いていく。「英語俚諺解」のはじめに東は、「……で、本誌に向って、いろいろ注文がある中で、英語のほなしを入れてほしいものだといふのもあった……それも宜しいが……夫よりも一層あの国の諺でものせたら……一挙兩得だと思ったから……本号からつづけて載せることにしたわけである」(一卷四号)と書いているが、これなども実質的に誌面の構成に責任をもっている「編集者」の言であろう。

これらのことからみて、東が『婦人と子ども』の実質的な編集責任者であったことは疑いない。従って興味の所在は、東が『婦人と子ども』の初代編集者であったか

否かではなく、そうであったにもかかわらず、その自明なことが自明なこととして活字の形で東在任中に残されなかった点にある。後に続く和田実や倉橋惣三が、編集者としてその名をはっきりと誌上に留めていることを思うと、彼の同誌における位置が他の編集者たちのそれとは違うことを感じさせる。当時の『婦人と子ども』が編集者の名を明らかにしなかったということは、「その時代」を解く鍵としてすくい上げるに足ることがらではないだろうか。

第二章 創刊に至る経緯

東基吉招聘

東基吉が東京女子高等師範学校附属幼稚園批評掛に任ずという辞令を拝したのは明治三三年四月、『婦人と子ども』創刊の前年であった。「当時幼稚園教育のことなどには全く無知であった私はちよつとがっかりしました……」(4)という突然の任命であった。この任命を受

けて「幼稚園のイロハから勉強」(5)しはじめた彼が、翌三四年一月には日本で初めての幼児教育雑誌を創刊に至らしめ、その創刊号には堂々と自身の保育論を掲載している。その間わずかに九か月。今日の目をもってすれば、実に驚くべきことである。

しかし、そもそも東招聘の理由が幼児教育研究の推進にあったとはいえ、その成果を幼稚園の保育の實際に還元させることよりも、外部に発表することの方により大きな期待がかけられていたと考えられるとすれば、この短時日の「雑誌発行」という出来事も納得のゆくところである。以下東招聘から『婦人と子ども』創刊までの日程を検討することによって、その間の事情を推察してみたい。

創刊に至る日程

これまで同誌発行は、明治二九年のフレイベル会創設時に決定されていたと考えられてきた。しかし、実際にはそうと断定しがたい。通常用いられている「フレイベ

ル会規則」(6)は創設時のものではなく、少なくとも明治三十一年四月以降のものと考えられるからである(7)。

この件は「フレーベル会報告第一年、二年」を見ればすぐにわかることなのであるが、それを見つけれないでいる。従ってここでは、東基吉以前に雑誌発行が考えられなかったことではないにしても、具体的な形をとりはじめたのは東以後であつたと考えたいと思う。

資料が足りないのではあるが、『婦人と子ども』の掲載記事から創刊の経緯をもう少し推し測ってみよう。

東は「明治三十四年のフレーベル会総会にこの機関誌発行の案を提出し」(8)たと述べているが、それは疑問である。フレーベル会総会は、フレーベルの誕生日四月二一日に開催される。『婦人と子ども』創刊が明治三十四年一月であるから、総会にかけたとすれば前年四月の総会であろうが、東着任が同じ月の初めであつたから、すぐに機関誌創刊を総会に提出するということは考えにくい。この年の「フレーベル会報告」が入手できないので確証はできないが、仮りに三四年の総会に提出したのが

事実とすれば、東招聘は雑誌発行請負以外のなにものもないということになる。しかし、「機関誌発行の案提出」が「三十四年」の「総会」であつたかどうかには疑問があるとしても、東がその具体案の提出者であつたのは確かなように思われる。

創刊号一〇九頁に、明治三十三年二月一日に開かれたフレーベル会第一九回常会の記事があり、その折に「雑誌発行の件につきての質問」が出たと記録されている。

「雑誌発行の件」という記載の仕方から、雑誌発行についてはそれ以前に常会ですでに話があつたとうかがわれている。フレーベル会常会は毎年二・六・十・十二月に開かれていたので、少なくとも十月の常会で話題にのぼつていたと考えられるのである。ただし、「雑誌発行の件につきての質問」(傍点筆者)という表現から、この件は常会で立案し、計画を積み上げてきたのではなく、「たたき台」のようなものがすでに別の所で作られて、それが会に諮られたという状況であつたと思われる。

東は前出の回想記の中で「そこで雑誌の名を何とつけ

るかという段になって、中村さん、盲啞学校長の小西信八先生、黒田先生、多田房之輔氏などを幼稚園に集まって貰って相談しました」と述べている。また、雑誌『保育』に掲載された東基吉・くめ夫妻訪問記「幼稚園黎明期を聞く」(9)には、「その頃フレーベル会というのがあって……その機関誌として雑誌を発行しようとしたところが、それを聞いた多田房之輔という人物や、もう亡くなったが小西信八氏など四、五人が集まり経営や雑誌の名称などいろいろ相談した結果……」とある。両者多少の違いはあるが、「幼稚園批評掛」に求められていた役割に答える一つの方法として東自身が雑誌発行を具体化し、その対外的な梓組(誌名、経営等)を東を招聘した主だった人たち並びにフレーベル会の重鎮と諮って決定した、ということだろう。これら四氏との談合は、常会への提案の関係から、最も遅い場合でも十月までに、おそらくはもっと早い時期に行われていたはずである。これ以上の日程の特定は現在のところできないが、着任後半年もたたないうちにここまで作業が進められてき

たことを考えると、彼の招聘が「雑誌発行」の伏線上に置かれていたと考えざるを得ないのである。おそらく東は、着任と同時に雑誌発行にむけてのスタートを切ったのであろう。そしてそれは、彼を招いた側の人々にとって期待するところであつたと言えるのではないだろうか。

発行

明治三十三年一月一日の第一九回常会での質疑を受け、創刊号は年が明けて一月二六日印刷、同二九日発行された。二号は二月八日印刷、一日発行。早くも三号からは毎月二日印刷、五日発行のペースが守れるようになっていた。

当時、雑誌の刊行は今日の慣行とは違って、例えば七月号は七月に発行するというやり方であつたようだ。原稿段階でも、今日では夏のうちから冬の分を手配・用意しなければ発行期日に間に合わない仕組になっているが、当時は原稿・編集・印刷・発行がすべてちょうど一

か月という、今日からみればうらやましいような、正に小気味よいサイクルで回っていた。打てば響く手ごたえである。それだからこそ投稿、質問などの読者との誌面を通しての交流、討論も生きてくる。「玉稿は毎月十五日までに御寄贈相なりたく候」というお知らせも見うけられるが、『婦人と子ども』は毎月五日発行であるから、投稿から発行まで二〇日あまりしかかかっていないことになる。時には四月二〇日になされた講演の筆記録が早くも五月五日発行の五月号に掲載されるという超早わざが見られたりもする。従って創刊号の準備も印刷日ぎりぎりまで行われていたであろうし、また毎号の編集の実務は休みなく回転していたことであろう。

東基吉とフレーベル会

ところで、このように雑誌発行のため奮迅の努力をした東基吉と、その発行母体であるフレーベル会との関係はどうなっているのだろうか。『婦人と子ども』に掲載されたフレーベル会幹事会の報告には、出席した幹事

名の最後に必ず肩書なしの「東基吉氏」という記載がある。彼自身、「会に関する記事は皆私が書きました」^⑩

と言っているように、「機関誌」編集のため、東は毎回の幹事会に必ず出席している。しかし彼は妻くめと共にフレーベル会々員としてその名を連ねてはいたが、最後まで幹事になることはなく、名目上はただ一会員にとどまったまま雑誌編集の任に当たっていた（後に客員として名を連ねはするが）。そして、その後附属小学校批評係兼任となり、和田実にバトンを渡すまで縦横の活躍をしながら、それ以後は完全に誌上から姿を消してしまったのである。^⑪

東基吉はこれらの点でも後に続く編集者たちとは全く対照的である。東時代の『婦人と子ども』とは何であったのか。東基吉をめぐるこれら小さな違和の数々は、初期の『婦人と子ども』を後の同誌の姿そのままから透かし見ることのむずかしさを語っている。あたかもこの時代を、一つの特別な時代として位置づけることを要求しているように思えるのだ。

Ⅱ節 誌面にみる東基吉とその時代

このような過程を経て、明治三四年一月、『婦人と子ども』は創刊号にふさわしく多方面にわたる記事を満載してその一步を踏み出した。子ども・家庭・学術・講義・史伝・文苑・説林・研究・雑録・彙報の各欄がひしめいて、編集者の意気込みが直接に伝わってくる。本節では東時代の同誌の姿を明らかにするために、その中からいくつかを取り出して少し詳しくみていきたい。

第一章 子ども欄

大きな活字で組まれ子ども欄には翻案の童話・創作話・なぞなぞ・歌など盛りだくさんに掲載されている。自分で読むには児童に、大人に読んでもらえば幼児にも、という内容である。もちろん保育者が後で子どもに話をするための材料にもなる。この欄のため東は大いに活躍し、「グリムやアンデルセン其他日本橋の丸善に行って西洋の童話の本をいろいろ探し出して、適当なものを

片端から翻訳したり翻案したり」⁽¹²⁾している。

これ以前に幼児のための話としてまとまったものは、明治二九年に刊行が始まった巖谷小波による叢書「日本お伽噺」だけであった。翻訳(案)ものとしては、初期の幼稚園でよく用いられたイソップが相当早くから訳出されていた。その「教訓」が受け入れられ易かったのか、古くから好んで読まれていたらしい。東の時代にはすでにかなり広く一般に供せられていたと考えられる。

イソップに比して、グリムやアンデルセンの訳出は遅れていた。アンデルセンは明治四四年になってようやく、まとまったものが相次いで紹介された。一つ一つの作品ごとではそれ以前から少しずつ訳出されている。明治二十一年、巖本善治訳「不思議の新衣裳」(『女学雑誌』・本邦初訳)、河野政喜訳「諷世奇談・王様の新衣裳」(春祥堂・アンデルセン単行訳書の最初)、二五年、巖谷小波訳「極楽園」(『幼年雑誌』)などである。グリムのものでは二十年、菅了法訳「西洋故事神仙叢話」、四二年、和田垣謙三・星野久成訳「家庭お伽噺」、単独の作

品としては上田万年訳「おほかみ」（三二年）がある。

(13)

これらは翻訳文学史上に残るものであるが、東が子ども欄のために訳出した作品もそれらと比肩しうるものである。例えば『婦人と子ども』一卷三号に掲載された「半太と小人」という話である。「むかしむかしある所に靴屋の半太とゆう正直者がありましたとさ……」で始まるこの物語は、明らかにグリムの「靴屋と小人」であろう。今まで知られている限りでは、この「半太と小人」が「靴屋と小人」の初訳である可能性が強い。

ところでここでおもしろいのは、登場人物のいでたちである。私が子どもの頃読んだ「靴屋と小人」では、小さなズボンに小さなシャツ、それに小さなとんがり帽子をかぶった小人が描かれていたが、「半太と小人」の小人たちは、小さな着物に小さな羽織袴、おまけに小さな足袋まではいてうれしそうに走っていく。一方、それを見送るのは半太と、丸髻に着物姿のお内儀である。どちらも靴とは縁のない姿である。このさし絵に思わずほ

えんでしまふ。この熱意は、さし絵までも「和訳」したA・L・ハウの労作「母の遊戯及育児歌」（フレイベル）を思い起こさせる。

この時代は、他には少年向けとして片山平三郎訳『ガリパルスン・メグリヤ 瓊幡児回鳥記』（明治一三年）、森田思軒訳「十五少年」（明治二九年）、それにジュース・ベルヌの冒険物位しかない時であったから、自ら子どものために童話を探して訳出するということは実に先駆的なことであった。『婦人と子ども』にはぜひ子どものための話を載せるのだという意気込みの直接の現れと言えよう。

翻訳ものの他にも、東は自ら「やまとの翁」と称して創作の話を子どもたちに贈っている。彼は子ども欄に特に力を入れており、他の欄には様々な変動があったにもかかわらず、この欄だけは彼が編集から遠ざかる直前まで続いていた。一卷では全体の一・四―二割が子ども欄であり、巻を経るごとにその割合は増えていく。五巻では実に半分を子ども欄が占めるまでになる。

「貞一の日記」

ページを繰るままにふと目にした東基吉の妻くめの「折にふれて」と題する歌に心を魅かれた。

紅染のうぶぎぬはんと手をとれば

まだみぬ稚児のおもかげにたつ

(三巻五号)

東夫妻の長男貞一氏は明治三十六年五月三十一日に誕生した。この歌は間もなく生れ出する我が子を心待ちにし、なつかしく思い描く未来の母親の歌であると同時に、それを自ら編集する雑誌に掲載した未来の父親の思いが託されたものであった。一年後、四巻七号から「貞一の日記」が始まる。筆者は「その母」東くめである。「貞一の日記」には、食事、遊び、病気のことなど日常のことながら、親となった喜びと責任とに裏うちされながらも淡々とつづられている。初期の『婦人と子ども』はある意味でこの親子と共に歩んでいったと言える。

五巻三号で東は「ひむかし」という署名で「子供の病氣につきて」と題する小文を書いて、幼児の下痢につい

て親の注意を促しているが、それに対応する時期の「貞一の日記」には、毎日下痢のことが書かれている。五巻六号には、これも自分の子どもの経験をもとに、「子供と間食」と題する文を書いている。「私共では子供に一切間食をさせないことに致して居ります。……余程迷ひましたが医師の勧めもあり、かたかた廃することにした。……」そして六巻四号では、「子どもの日記につきて」と題して、子どもの日記をつけることを勧めている。ちょうどその頃東は「育児日誌」を著しており、同じく四号に、「育児日誌」本月中発刊、という発売元弘道館の広告がでている。これは、『婦人と子ども』と東自身の子どもの間の関わりが交差したところに生み出された一つの結実と言えよう。「貞一の日記」に表われたくめの記述と、それに対応する形で書かれている東の小文は東の関心のあり方がどんなものであったかを示しているように思われる。彼のここにおける関心は、狭義の保育研究というところではなく、もっぱら我が子を育てる母親のために、ということににあったように思われる。

子に対する愛情の意識的な発露としての教育、ということとをめぐっていたのではないだろうか。これは、東時代の『婦人と子ども』を貫いている大きな流れの一つである。

この項では東くめについて一言しておきたい。くめ夫人は、『鳩ぽっぽ』『お正月』『水あそび』などの幼稚園唱歌の作詩者として知られており、『婦人と子ども』の文苑欄でも大いに活躍している。彼女が滝廉太郎らと共に『幼稚園唱歌』を出版したのは明治三四年、『婦人と子ども』創刊の年である。夫妻が時を同じくして幼児教育界に新風を送り込んだわけである。そして、東が編集を離れた後、全く『婦人と子ども』から姿を消してしまつたのと同様に、くめ夫人も『幼稚園唱歌』以後、子どものための歌を作っていない。このような彼女の中に、基吉の幼児教育界への関わり方と似たものが感じられる。夫妻は共に草創の時代に幼児教育界に生きたのである。

(続く)

註

1 「明治保育文献集」日本らいぶらり 別巻295頁 (宋戸健夫 著)

2 前掲書217頁 (水野浩志著)

3 津守・久保・本田共著『幼稚園の歴史』厚生閣 昭31 231
・270頁

4、5、8、10、12 東基吉『婦人と子ども創刊当時のことも
と其頃の幼稚園の状況に就て』『幼児の教育』50巻11号

6 例えば日本保育学会「日本幼児保育史」第二巻165頁所載の
もの

7 「フレイベル会報告第三年」の規則改正事項参照

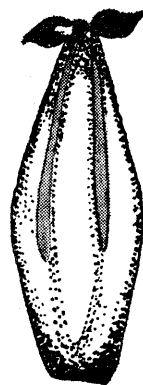
9 「幼稚園黎明期を聞く」『保育』昭32・11号 ひかりのく
に昭和出版

11 唯一の例外が東基吉の前掲文である。

13 以上、国立国会図書館編『明治大正昭和翻訳文学目録』風
間書房 昭34 および『児童文学辞典』東京堂出版 昭45

保育の一日⑧

——存在世界としての保育——



津 守 真

五 物質のイメージ

1 保育と〈物質のイメージ〉

人の身体と物質との接するところに生じる感覚と、これがつくりだすイメージの推移変化は、明確な意図をもった意識的活動ではないし、また、全く無意識の活動でもない。その中間にあって、なかば意識されてはいる

が、明確な意識にはなっていない。幼児の遊びには、このような物質のイメージを本体とする場合が多い。土の中に手をいれてこねているうちに、手の中の土はつぎつぎに形をかえ、子どもはその過程をたのしむ。おにごっこでは、追いかけて追いかけられて、大気の中を走りまわる感覚をたのしみ、かくれんぼは、物蔭の片隅に身をひそめる空間の感覚が主となっている。ままごとも、その内容は、土をこねること、切り刻むこと、美しく並べる

ことなど、物質のイメージが主となっていることが多く見られる。

保育者は、子どもの活動に参与し、子どもがふれるのと同じ物質に直接ふれることにより、自らの物質のイメージをもつことができる。これは子どもと一緒の遊びの中に浸るときに起きることである。また、保育者は子どもと応答するパートナーとなることによって、子どもとイメージを共有することができる。これは子どもの誘いや要求にこたえて動くときに体験される。また、子どもの行動の観察にもとづいて、子どもの感じているであろうイメージを推察し、解釈することができる。物質のイメージは、触覚、運動感覚等、身体感覚にもとづくものであるから、おとなも、子どもと同様に、自らの身体感覚によって体験し、身体感覚の水準で共感することが理解の出発点となる。

イメージという語が用いられるとき、その理解の仕方はいくつかの異なった場合がある。第一には、眼前に見

ていたものが、眼前から取り去られても、目の前にあるかのように思い浮べる精神機能をいう。これは *representation* すなわち、再現あるいは表象能力であって、ピアジェがいうイメージである。第二には、無意識の内容を、象徴あるいはシンボルとしてつくり出す能力で、フロイトやユングなど精神分析がいう場合のイメージである。第三には、ここで述べている「物質のイメージ」で、レヴュリー、夢想など半意識の状態で、物質に直接ふれる身体感覚に伴うイメージである。パシユラール^{注1}が体系的に展開した一連の著作の主題である。第四には、普通に、何かをイメージするというような場合で、想像によって自由に頭に思い浮べるというような通俗的な用い方である。これらは相互に関連はあるが、それぞれ異なった精神機能を指しており、同じイメージという語を使っても異なった内容を意味するので注意を要する。ここでは、「物質のイメージ」を取り扱う。

物質のイメージは、日常生活の中で、普通に体験されている現象で、ことに、言語を十分にもたない子どもに

おいては、生活の中でその占める位置は大きい。しかし、客観性や目標意識、論理など合理的意識に価値をおくおとなは、物質のイメージの存在や、その果す重要さに気付かない場合がある。保育は、毎日の日常生活を進める中で行われるので、行動の結果や成果のみに目が奪われて、子どもの生活を動かしている原動力と子どもの世界に気づくには、おとなの側に、見方の転換の努力が必要になる。おとなは、自らの判断を停止して、その場にとどまり、予期しなかった子どもの行為に心を開き、自らの感覚に敏感になることを試みることにによって、それは可能になる。このような、おとなにとって空白の瞬間がなければ、保育は成り立たない。このことは、おとなの人生における価値観を放棄することを意味するのではない。おとなは、この空白の瞬間の中で、物質のイメージを喚起され、子どもの世界に共感し、自らの世界が開かれ、自分を変化させられるのである。

2 物質のイメージの記述

物質のイメージは、言語以前の身体感覚とそれに伴うイメージであるので、文字で記述することに困難が伴う。たとえば、砂場で、子どもは砂を高く積み、穴を掘り、水を注ぎ、砂と水をまぜ合わせてだんごをつくるなど、一時間も二時間もあきることなくあそぶが、その経過を詳細に記録することは容易でない。手の動きとそれにもなう砂の変化は微妙であって、何と書き記してよいかわからないことが多い。しかし、自分も一緒に手を砂の中にいれ、水と一緒にこねて、子どもと同じようにしてみると、何度も砂を運び出すことによって深い穴を探つてゆく感覚、冷たい水を砂とまぜて、それを手の中で固めてゆく感覚など、触覚運動感覚によって、忽ち知ることのできることもある。これは客観的な行動記録ではとらえきれない内面の過程である。しかも、単に内面だけのことはなくて、外在する物質との接触によって、外に形を表出してゆく過程である。

バシュラールが、「大地と意志の夢想」^{注2}の中で、捏り粉について述べているところは、子どもの砂遊びに類似している。彼によれば、大地の物質の「抵抗と柔軟さの完全な綜合」「受けいれる力と拒否する力のすばらしい均衡」が、働く手に直接の活力を与えて、粉や土があまり軟らかすぎるとか、あまり硬すぎるといふ判断が生じる。丁度よい捏り粉をつくるのはどの程度に粉と水をまぜたらよいかということは、手が本能的に知っている。

「捏粉を夢想する者はこの完全な捏粉を手ではっきりと識別するのである」^{注3}つまり、人は捏り粉を物質のイメージによってとらえている。その捏ねるイメージを記述するのに、彼は詩人による記述を引用して、そのイメージの存在の確証としている。それはひとりの聾の男のパン職人の手についての記述である。

そのパン職人は、「まぜ具合をみたあとで、桶の中になんと多く水を入れてそのまぜものをのぼした。その配分の正確さについて、彼の手は自信にみちており、水差しのかたむけかたは実に巧みであって、土器の口と上

等のメリケン粉の間にきれいな水が、ぎれめのない、完全な水晶の弧をえがくのを私は見た」^{注4}。

これは高名な詩人の記述であるが、この無名のパン職人の手の動作を、ひとりの子どもの砂場の行為におきかえても通用するであろう。また、高名な詩人を、無名の一保育者におきかえても通用するはずである。これと類似した手の動作は、幼稚園の砂場で無数にくり返されている。

バシュラールは、読書中に膨大な数のイメージを採録したという。私共は、保育の中で、無数のイメージに出会う。詩人がそのイメージを言語にするのに苦心したように、私共は、子どもと共にあって、たしかに体験として共有したイメージを、言語によって記録するのに苦労する。しかもそのイメージは、子どもに即し、具体的場面に即し、保育者に即して多様である。保育研究においては、すでに、多様な物質のイメージの記述の試みが多くあるが、今後に開かれている分野は大きい。^{注5}

3 物質のイメージの個別と普遍

物質のイメージは、触覚運動感覚によるところが多く、したがって、それは個々の人が具体的なものに向うところに生れる。また、それを第三者の立場からとらえる場合には、個が具体的に向うところに、第三者である私が身をむけるときにはじめて了解される。遠くから、視覚によって、客観的に見ていたのではわからない。

このことは、バシュラールも再三述べている。「眼――

――この監視者――が仕事をさまたげにあらわれる。」^{注6}と彼はいう。物質のイメージは、生き生きとしており、本人にとつては疑いもなく明瞭であるのに、眼が介入し、客観的概念になると、生命力が失せてしまう。それはイメージを記述することに伴う宿命ともいえる。それに再度生命をふきこもうとするならば、「視覚と同様に、手が手の夢想と手のポエジーをもつことを理解しなければならぬ」^{注8}のである。子どもが物質を扱う行動の観察を視覚にとどめず、眼を反転させて、子どもの触覚の座に身

をおき、そこに生れ出るイメージをとらえること、しかもそれを単なる情熱的主観的確信としてとらえるのではなく、人間の精神の根底に存在するイメージとして理解しようとする事、それはすでに解釈の領域にはいるのかもしれないが、そこに個別の物質のイメージを普遍化することの課題がある。

バシュラールは、燃え立つ白樺に、狂熱的に突進する蛾の大群のことをのべて、蛾にとつて、それは「大火災の光景」^{注7}にひとしく、「このまばゆい光は、燃えあがる森全体の眺めがわれわれにとってそうであるように、彼らを陶醉させ高ぶらせるのだ」という。この文章と共に、私は精進潮のほとりで、夏の夜、火を焚いたとき、そこに向つて突進しようとした子どもを必死になつておさえたのを思い起す。火に向つて突進する知恵おくれの子どもは行動は、その子どもの火の物質のイメージを示している。それをおさえる私もまた、高ぶる火のイメージに怖れており、抑える私の力の大きさは、子どもがそれに向う力の大きさをも示している。その力によって、

子どもの火のイメージを理解してよいだろうと思う。

捏り粉について、バシュラールは記述した後、捏り粉のイメージは、物質としての土についてのみでなく、自分自身について妥当すると述べる。「すべてがわたしにとって捏粉だ。わたしの成長がわたし自身の素材であり、わたしの固有の素材は、行動と情熱だ。わたしは本来に最初の捏粉である」^{註8}と彼はいう。物質のイメージは、外在する物質との間に生れる内的イメージにはじまるが、イメージとしての物質にも適用される。一塊の捏粉のような、まだ形をもたない目に見えない素材を前にして、捏ねるイメージが動きはじめる。カロッサの「幼年時代」には、温かく匂いのよい飴をひきのばすのを眺めていた楽しさについて述べられ、夢の中で「ぼくはしばらく捏粉をねったり、捏ねたりした。そしてふと見るとぼくの手のなかにすばらしく美しい小さな人間がいるのだ」^{註9}という一節が記される。それは粘土の人形の生成であると共に、人間形成のイメージに比せられる。それ

故に、捏粉の物質のイメージに満ちた台所から子どもを遠ざけることは、後になって決して知ることのできない夢から子どもを引き離すことになる。そして、「小さな子供のとき、家政婦のまわりをうろついたことのある人はしあわせである」^{註10}とバシュラールは述べる。

保育には、実に多様な物質のイメージがみちている。保育の一日は、粘土をこねる作業にも似ていて、正確なスケジュールに従って部分を組み合わせてゆくのではなく、こねているうちに思いがけない形ができてゆく。バシュラールが「それぞれの労働がそのひいきの夢想家をむかえ、その夢に案内者をもつ日が早くこないものか、工場ごとに詩のための机があかれる日よ、早くこい」^{註11}と云っていることは、保育にそのままてはまることばである。保育者において、全体を目で見渡すだけでなく、それぞれの子どもの身になって、子どもとゆっくりとつき合い、そこで得られたことをことばにしてゆくならば、保育の場はつぎることのない人間研究の場となる。

しかし、子どもの世界は、それに価値をおかない眼にはかくされている。バシュラールが云うように、「夢み^{註12}ることを知らない意志は、盲目で偏狭」である。保育の意志が、想像力を失い、おとなの立場からの一方的な目標遂行の手段となるときには、その意志は、図らずも「獸的本能」の代弁者となりさがり、高尚な精神をもった人間の意志ではなくなる。物質のイメージは、後になって理性的合理的の精神を形成する基礎でもあり、また人間らしさの根源を保持させる根底でもある。

保育を終えて、子どもたちが目の前から去った後、保育室や園庭の掃除をしながら、心の中に浮び上ってくるのは、子どもと共に過した中で得られた物質のイメージである。それを反芻し、その輪廓を少しずつたどるとき、子どもの世界が次第に明瞭になってくる。それは個に即したイメージが普遍へと転換する作業の第一歩であると思う。

(続く)

注1 バシュラールは科学哲学者であるが、その後半生において、物質の四元素といわれる火、水、風、土及び、時間と空間の物質のイメージについて、文学ことに詩を素材として体系的な著作をした。

注2 バシュラール、及川馥訳「大地と意志の夢想」思潮社

一九七二

注3 前掲書、P 89

注4 " P 90

注5 本田和子「子どもたちのいる宇宙」三省堂 一九八〇

「異文化としての子ども」紀伊国屋書店 一九八二 参照

注6 「大地と意志の夢想」P 91

注7 バシュラール、前田耕作訳「火の精神分析」せりか書房

一九六九 P 39

注8 「大地と意志の夢想」P 91

注9 前掲書 P 106

注10 " P 96

注11 " P 103

『邦訳 日葡辞書』⑩

——わが国中世の児童文化史研究によせて——

M・M・M

R字で始まる語

(承前)

リコウジャ (利口者)

スルドナ クチノモノ (利な口の者) 物言いがはきはきし
ており、鋭敏で賢い人。

リュウニヨ (竜女)

ゼンチヨ (異教徒) が物語るところの竜の娘。

リュウニヨ (竜女)

海底を治めていると想像されている竜王の娘。

ラウボ (老母)

オイタ ハハ (老いた母) 年よった母。

ラウブ (老父)

オイタル チチ (老いたる父) 年よった父。

ラウニヤク (老若)

S字で始まる語

オイタリ、ワカシ (老いたり、若し) 老人と若者と。

サカゴ (逆児)

さかさまに、すなわち、足から先に生まれる子供。

サカヤキ (月代)

頭の一部分で、こめかみと後頭部とを除いた部分。

(例) サカヤキヲ ソル (月代を剃る) 頭のこの部分、

すなわち、脳天と天辺の部分剃る。

(例) サカヤキヲ トルまたはヌク (月代を取る、また
は、抜く) 昔そうする習わしであったように、頭のこの

部分の髪の毛を引き抜く。

サガリバラノコ (下り腹の子)

私生児、すなわち、本妻でない妻の子。卑語。↓ラクイバ

ラ

サイヂョ (妻女)

結婚した女。

サイシ (妻・子)

ツマ、コ (妻、子) 妻と子と。

サイシヨウ (妻妾)

ツマ ツマ (妻つま) 結婚している女。

サイユウ (再遊)

フタタビ アソブ (再び遊ぶ) 再び気晴らしをすること。

文書語。

サン (産)

ウム (産む) 出産。

(例) サンヲ タヤスウスル (産を輒うする) 安産する。

(例) サンノ ヒモヲ トク (産の紐を解く) 産む。

サンドウ (山童)

ヤマワラワ (山童) 山住みの子供。

サンゴ (産後)

出産の後。

(例) サンゴ、サンゼン (産後、産前) 出産の後と前と。

サンゼ (三世)

人が三度生まれ出る世〔過去、現在、未来〕

サンゼン (産前)

出産の前。

サンナン (産難)

ナンザン (難産) に同じ。出産の大きな危険や難儀。

サンヤ (産屋)

ウマルル イエ (産まるる屋) お産をする家、あるいは、

子の生まれる家。一般にゴサンヤ (御産屋) と言い、貴人について用いる。

サヲトメ (早乙女)

田に稲〔苗〕を植える女。詩歌語。

サシグスリ (差薬)

眼薬。また、九州方言では、未成熟の嬰兒を胎内からおろすための薬。

ソババラ (側腹)

(例) ソババラノ コ (側腹の子) もう一人の妻妾の生

んだ庶子。

ソクヂョ (息女)

ムスメ (娘) に同じ。娘。

ソクナン (息男)

ヲノコ (男) 男子。

ソダチ、ツ、ツタ (育ち、つ、つた)

扶養される、あるいは、成育する。

ソダチ (育ち)

成育。

ソダチユキ、ク、イタ（育ち行き、く、いた）

次第に成育していく、あるいは、扶養されていく。

ソン（孫）

すなわち、シソン（子孫）。子孫。

ソンジ（孫児）

マゴ（孫）に同じ。小さな孫。文書語。

ソンワウ（孫王）

テイワウノ マゴ（帝王の孫）。国王の孫。

ソンゾン（孫々）

子孫。

（例） シシ ソンゾンニ イタルマデ（子々孫々に至る

まで） 末々の子孫まで。

ソウリヤウ（惣領）

長男。

（例） ソウリヤウソシ（惣領庶子） 長男とそれ以外の息

子と。

ソウリヤウゴ（惣領子）

長男。

ソウリヤウマゴ（惣領孫）

↓チャクソン

ソウリヤウシキ（惣領式）

世襲財産、あるいは、相続財産。

ソシ（庶子）

長男以後に生まれた子ども、すなわち、どの息子であれ長男でない者。

ソソロウタ（漫歌）

子どもや働いている者が歌うように、別に意図もなく、意識もしないで歌う歌謡。

スグロク（双六）

tabols のような勝負事。

（例） スグロクラ ウツ（双六を打つ） tabols の遊びをする。

* tabols は、元来いろいろの勝負事に用いる駒の意。

スグロクバン（双六盤）

双六をする盤。

スグロクウチ（双六打）

双六を打つ人。また、時には、その上手な人を意味する。

スグロクスキ（双六好き）

双六の賭博師、または、双六を打つことの好きな人。

スマウトリグサ（天門冬）

すなわち、スマイレ（菫） 菫の花。これは子供の言葉である。

ミヒヤエル・エンデの新作「はてしない物語」が、静かなブームを呼びつづけているという。邦訳も、一月も経ないのに版を重ねた。二八〇〇円、五八九頁の、この部厚な本を、子どもたちがそれほど読み急いだとは思えない。従って、今回も、前作「モモ」と同様、主たる読み手は大人なのであらう。

人間的時間の剝奪という形で、現代文明の負性を代表する「灰色の紳士たち」と、それと戦う少女「モモ」。彼女は、年令も出自も不明のよるべない浮浪児で、そのゆえに、文明化されない元型的な子どもであった。彼女は効率と有用性に災いされず、結果として巧みな「遊び手」であり、「他人の話をよく聞く」才能の持ち主であった。彼女が、時間盗人と戦い得たのは、ひたすら、その才能のゆえであり、特別な武器も、特別な力も、必要とはしなかった。与えられた役柄を、ただあるがままに遂行しただけである。

この物語が、子どもにもまして大人たちに注目され、とりわけ、現代文明の直進性に危機感の強い一群の知性たちの筆によって、様々な論考が世に問われたことは、私どもの記憶に未だ新しい。「モモ」に託されたエンデのメッセージは、当時の人々の心を強く抱えたのであった。

「はてしない物語」は、「モモ」よりも多義的であつて、メッセージも単一ではない。然し、ここでは、人と世界の破壊者が、「虚無」として抱えられている。人が、夢や物語、つまり日常性を越えた不可視の世界を否定するとき、虚無がすべてを侵蝕するというのだ、救世主の役柄は、やはり子どもに委ねられる、アトレーユ、バスチアンという二人の少年と、女王「幼ごころの君」……。

人と世界は、子どもによってしか、よみがえり得ないと言ふのだからか。

(H)

幼児の教育 第八十一巻 第十一号

十一月号 © 定価二七〇円

昭和五十七年十月二十五日 印刷
昭和五十七年十一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼・津 守 真
発行人

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

●本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

フレーベル館の福祉教育図書

障害児保育の現場から

B 6 判 336頁 定価 1,200円 千250円
新沢誠治 編著

障害児保育を模索しつつ、とりくんでいる保育者たちの座談会

身辺自立、歩行、ことばを育てるポイントは何か。健常児との関係、親と接する際の配慮すべき点は何か。発達理論を学び、目の前の子どもに学びつつ辿った、現場ならではの悩み、迷い、感動が具体的にいきいき伝わってきます。

障害児の娘と保育の仕事と

重い脳性まひの娘をもって保育園をつくったある母の記録

B 6 判 256頁 定価 1,000円 千250円
土屋多喜栄 著

重症の小児まひ児をもったひとりの母が絶望のどん底から這い上がり、保育の仕事を通じて生きることの尊さを知った。やさしくも大きくたくましく生きる人間の記録である。障害児指導の関係者ばかりでなく、すべての人に読んでほしい書。

精神薄弱児の教材・教具

A 5 判 328頁 定価 2,000円 千300円
特殊教育教材研究会著
三木安正・山口 薫・武内二三雄 編

精神薄弱児の教育をスムーズに行なうために教材・教具は重要な意味をもっている。本書は、感覚訓練、運動機能訓練、身辺生活の処理能力、集団への参加、生活経験を豊かにする、生産的生活意欲を高める等の教育・訓練に適した教材・教具及び実践事例を豊富に紹介する。

重度障害児教育の新分野をひらく…… 障害児のムーブメント教育 原理と指導の実例

A 5 判 320頁 定価 2,900円 千300円
小口勝美・小林芳文・高山忠雄 編

障害児教育の新しい方法として世界的に注目されている運動(動き)を中心にした教育理論を、わが国でさらに研究、実践をつづけ、動きの少ない子どもの指導から重度精神遅滞児の教育、自閉症児のスイミング療法など、最新の豊富な実践事例で紹介する。

ちえ遅れの子の体育指導 リズム運動

B 5 判 120頁 定価 2,000円 千250円
加藤俊子 著 ステレオシート 2 枚つき

リズムに合わせて歩く、走る、あげおろし、屈伸、跳ぶ、ねじる、回旋、ずらす、力を入れる、力を抜く、振るなど基礎的な運動技能を習得させ、子どもの身体的・精神的発達の準備を整え、学習活動へと導く。

ちえ遅れの子の養護・訓練

A 5 判 240頁 定価 2,400円 千300円
特殊教育教材研究会 編

精神薄弱養護学校及び特殊学級における「養護・訓練」の意義と指導領域、課題等を明らかにし、教育現場での受けとめ方を、感覚機能、運動機能、職能の訓練、言語の訓練と治療など具体事例で詳述する。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

好評発売中

子どもの遊び

(全6巻)

○歳から二歳(3巻セット)

土屋多喜栄 丸尾ひさ

本吉圓子 田中文字 著

絵・浜田洋子 川上尚子 冬野いちこ

三歳から六歳(3巻セット)

本吉圓子 前典子 笠間典美

田中文字 矢作邦子 著

絵・ふじたひでみ 上條滝子 おかいながまさ

いずれもセットケース入

セット定価 各3,300円



0歳から6歳までの発達に
応じた基本的な遊びを
すてきなイラスト入りで
紹介。

この本に収録した遊びは、0歳から6歳までの子どもの成長過程において、だれでもが大好きで、必ずといってよいほど通過する遊びです。

また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の目でまとめたものです。

遊びの中で何が育っているか、保育者はどんなかわかり方をすればよいのか、どうしたらその遊びがさらに楽しくなるかなどについて考え直すヒントがたくさんもり込まれています。



イラスト
浜田洋子

ワンくん こんにちは

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館